Ⅲ 学校評価自己評価

１．学園保幼小中一貫教育報告一覧

学 園 名	「目指す子ども像」、教 育 目 標
1 峰山学園	【教育目標】　「自己肯定感を持ち、自分の将来を展望し、共に学ぶ子の育成」 【目指す子ども像】 「意欲を持って自ら学ぶ子ども（知）」 「思いやりのある子ども（徳）」 「進んで心と体を鍛える子ども（体）」
2 大宮学園	（1）教育目標　自他を尊重し、自ら学ぶ　子どもの育成 （2）目指す子ども像 ○ 意欲的に学び、チャレンジする子ども（知） ○ 自他を大切にし、思いやりのある子ども（徳） ○ 心身を鍛え、活動的な子ども（体）
3 網野学園	【目指す子ども像】 あ：明るく元気に進んで学ぶ子　【知】意欲的に学習に取り組む子ども み：みんななかよく支え合う子　【徳】規範意識をもち、仲間と支え合う子ども の：のびのび生き生きやりぬく子　【体】粘り強く心身を鍛え、やり抜く子ども 【教育目標】　将来に夢と希望をもち、郷土を愛し、知・徳・体の能力を伸ばす子どもの育成を図る教育の推進
4 丹後学園	「目指す子ども像」 ①ことばで伝え合い、主体的に学ぶ子　【知】 ②自分を大切にし、人を思いやれる子　【徳】 ③ねばり強く身体をきたえる子　【体】 教育目標　「夢と希望と創造性あふれる豊かな心を持ち、未来に向けて主体的に生きる子どもの育成」
5 弥栄学園	教育目標　「ふるさとを愛し、主体的に学び、心豊かで、たくましく生き抜く子どもの育成」 目指す子ども像 （知）知識と技を磨き、活用する子　＊自ら課題に取り組む（自主的な姿勢） （徳）自他の良さを知り、共に伸びる子　＊仲間と知恵を絞る（対話的な学び） （体）心身を鍛え、何事もやりぬく子　＊解決策を探り、自信をつける（深い学び）
6 久美浜学園	[教育目標]　「ふるさとを愛し、意欲的に学び、やさしい心をもち、根気強く努力する子どもの育成」 [目指す子ども像] （知）意欲的に質の高い学力を身につけようとする子ども （徳）自ら正しく判断、行動し、豊かな心をもつ子ども （体）心身を鍛え、粘り強く最後まで、協力して取り組む子ども

２．京丹後市立こども園、学校評価自己評価報告一覧

学 校 名	学 校 ・ 園 教 育 目 標
1 峰山こども園	“笑顔でつなごう。心とこころ!!” ～いっぱい遊ぼう　夢中になって～ (1)生活に必要な習慣・態度を身に付け、健康な心と体で生きる力を育てる。 (2)主体的に活動し、言葉を介してコミュニケーション力を育てる。 (3)身近な人や地域とのかかわりをもつ力を育てる。 (4)友達と関わりながら、夢中になって遊びこめる環境を整えながら、持続力や協同力を育てる。
2 大宮こども園	人との関わりや体験を通して、心豊かでたくましく、生き生きとあそぶ子どもの育成 ・健康で安全に活動する子ども ・身近な環境に自ら関わり、主体的に行動・活動する子ども ・人の話をしっかり聞き、自分の思いや考えを素直に表現できる子ども ・素直で思いやりがあり積極的に関わり合う子ども
3 網野こども園	『園児自らが主体的に環境に関わり、心豊かでたくましく生きる力を育てる。』 (あ)明るく元気で主体的に活動する子どもの育成 (み)みんななかよく思いやりのある子どもの育成 (の)伸び伸び生き生きやりぬく子どもの育成 ＜テーマ＞ 『どきどき　わくわく　きらっ！　ひとりひとりがかがやいて』
4 丹後こども園	・生活や遊びの中で様々なことに心を動かし心豊かな園児を育む。 ・地域に愛され、保護者に信頼される園づくりを進める。 ・資質向上を目指し、職員同士が互いに学び合える組織づくりを進める。
5 弥栄こども園	１生活に必要な習慣・態度を身に付け、健康な心と体を育てる。 ２自ら様々な環境に関わり意欲的に遊ぶ中で豊かな心を育てる。 ３身近な人や地域と関わり、思いやりの心や人権意識、規範意識の芽生えを育む。
6 かぶと山こども園	こども園教育目標 「元気な体と豊かな心、生きる力を持った　たくましい子ども」 ≪元気　勇気　笑顔　つながれ仲間≫ ～一緒に遊ぼう！もっと遊ぼう！心と体をはずませて～ １　園児自らが興味関心をもって環境に関わり、心豊かでたくましく、生きる力を育てる。 ２　人との関わりの中で、人に対する愛情と信頼感、人権を大切にする心を育てる。 ３　相手の思いを受け止めながら、自分の思いや考えを表現する力を育てる。

学 校 名	学　校　・　園　教　育　目　標
7 峰山小学校	多様な人々と協働し、個性や能力を発揮して主体的・自律的に生きる力を育てる。 　1　自ら学び、学んだことを伝え合う子どもを育てる。 　2　生き方・在り方を深く考え、自律して行動する子どもを育てる。 　3　よりよい社会をつくろうと力を合わせる子どもを育てる。
8 いさなご小学校	教育目標　「自己肯定感を持ち、自分の将来を展望し、共に学ぶ子の育成」 目指す子ども像 　1　意欲を持って自ら学ぶ子ども 　2　思いやりのある子ども 　3　進んで心と体を鍛える子ども
9 しんざん小学校	1　一人一人が自己肯定感を持ち、いきいき活動する学校【児童・生徒】 2　「中学校卒業時の子どもの姿」に全教職員が責任を持つ学校【教職員】 3　保護者・地域に信頼される学校【保護者・地域】
10 長岡小学校	「峰山学園」の経営方針を踏まえ、教育活動全体を通して学園教育目標「自己肯定感を持ち、自分の将来を展望し、共に学ぶ子の育成」に迫る。 〈峰山学園　めざす子ども像〉 　・意欲を持って自ら学ぶ子ども（知） 　・思いやりのある子ども（徳） 　・進んで心と体を鍛える子ども（体）
11 大宮第一小学校	「学校教育目標」（長期目標） 　◆自他を尊重し、自ら学ぶ　こどもの育成 「目指す学校像」 　◇一人一人が輝き、生き生き活動する学校【児童】 　◇やりがいを持って自分の力を発揮する学校【教職員】 　◇安心して子どもを任せられる学校【保護者】 　◇他地域に誇れる地域とともにある学校【地域の方】
12 大宮南小学校	「自他を尊重し、自ら学ぶ　子どもの育成」 　・意欲的に学び、チャレンジする子ども 　・自他を大切にし、思いやりのある子ども 　・心身を鍛え、活動的な子ども 大宮学園「教育目標・目指す子ども像」の実現を目指し、学園の園所や小中学校の保育・教育から謙虚に学び、常に自校教育の改善に努める。
13 網野北小学校	1　落ち着いた学校、落ち着いた授業により学力を付ける。 2　規範意識を醸成し、思いやりをもち仲間と共に生きる、豊かな人間関係を築く力を育てる。 3　すべての子どもに、未来を展望し、自ら将来を切り拓く力を付ける。 4　自然・人・社会とのつながり、郷土を愛する心を育てる。
14 網野南小学校	網野学園保幼小中一貫教育の目標から 　「将来に夢と希望をもち、郷土を愛し、知・徳・体の能力を伸ばす子どもの育成」 【目指す子ども像】 　・あかるく元気に進んで学ぶ子 　・みんななかよく支え合う子 　・のびのび生き生きやりぬく子
15 島津小学校	1　落ち着いた学校、落ち着いた授業により学力を付ける。 2　規範意識を醸成し、思いやりをもち仲間と共に生きる、豊かな人間関係を築く力を育てる。 3　すべての子どもに、未来を展望し、自ら将来を切り拓く力を付ける。 4　自然・人・社会とのつながり、郷土を愛する心を育てる。
16 橘小学校	【教育目標】 　「将来に夢と希望をもち、郷土を愛し、知・徳・体の能力を伸ばす児童・生徒の育成を図る教育の推進」 【目指す子ども像】 　あ：明るく元気に進んで学ぶ子　【知】意欲的に学習に取り組む子ども 　み：みんななかよく支え合う子　【徳】規範意識を持ち、仲間と支え合う子ども 　の：のびのび生き生きやりぬく子【体】粘り強く心身を鍛え、やりぬく子ども
17 丹後小学校	教育目標（丹後学園共通） 　「夢と希望と創造性あふれる豊かな心を持ち、未来に向けて主体的に生きる子どもの育成」 ＜目指す学校像＞ 　1　よく考え学ぶ学校 　2　友だちと仲良くする学校 　3　最後まで粘り強く努力する学校 　4　家庭・地域のつながりを生かした学校
18 宇川小学校	夢と希望と創造性あふれる豊かな心をもち、未来に向けて主体的に生きる子どもの育成 　〇目指す子ども像 　(1)言葉で伝え合い、主体的に学ぶ子(知) 　(2)自分を大切にし、人を思いやれる子(徳) 　(3)粘り強く身体を鍛える子(体)
19 吉野小学校	1　生徒指導の３機能を生かした授業づくりと学級経営を推進し、基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得と、思考力・判断力・表現力の育成、主体的に学び向かう力の育成を図る。 2　確かな学びの力と、豊かな人間性を育み、一人一人が大切にされる心の教育を推進する。 3　学園の保幼小中一貫教育を、校種間における様々な取組等を充実させながら推進する。 4　家庭、地域とつながり、信頼される学校、特色のある学校づくりを推進する。

学 校 名	学　校　・　園　教　育　目　標
20 弥栄小学校	「ふるさとを愛し、主体的に学び、心豊かで、たくましく生き抜く子どもの育成」 ・知識と技を磨き、活用する子 ・自他の良さを知り、共に伸びる子 ・心身をきたえ、何事もやりぬく子
21 久美浜小学校	教育目標【久美浜学園全体】 「ふるさとを愛し　意欲的に学び　やさしい心をもち　根気強く努力する子どもの育成」 目指す子ども像【久美浜学園全体】 （１）意欲的に質の高い学力を身に付けようとする子ども（知） （２）自ら正しく判断、行動し、豊かな心を持つ子ども（徳） （３）心身を鍛え、粘り強く最後まで、協力して取り組む子ども（体） 重点目標【久美浜学園全体】 「意欲的に生活・学習に取り組む子どもの育成」　～　子どもの実態や系統性を踏まえた指導　～ 指導の重点『学力の向上』 ①基礎・基本の徹底　②主体的に学ぶ力の伸長　③家庭学習時間の確保 校訓「一生懸命」を意識した教育活動の推進 指導キーワード「ポストコロナを受け【創造と協働】」的な業務推進
22 高龍小学校	意欲的に生活・学習に取り組む子どもの育成 ―　子どもの実態や系統性を踏まえた指導　― １　基礎・基本の徹底 ２　主体的に学ぶ力の伸長（授業づくり） ３　家庭学習時間の確保
23 かぶと山小学校	１　久美浜学園教育目標 「ふるさとを愛し、意欲的に学び、やさしい心をもち、根気強く努力する子どもの育成」 ２　めざす児童像 （１）意欲的に質の高い学力を身につけようとする子 （２）自ら正しく判断、行動し、豊かな心をもつ子 （３）心身を鍛え、粘り強く最後まで協力して取り組む子
24 峰山中学校	【教育目標】 自己肯定感を持ち、自分の将来を展望し、共に学ぶ生徒の育成 【めざす生徒像】 ・意欲を持って自ら学ぶ生徒 ・思いやりのある生徒 ・進んで心と体を鍛える生徒 【重点課題】（社会的自立につなぐ教育） ・「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実を図り、「主体的・対話的で深い学びの実現」に向けた授業改善の推進と学力の向上 ・探究的な学びを通じて課題解決能力をはぐくむ教育を推進 ・つながる力を生かした豊かな人間性の育成と不登校の解消・未然防止
25 大宮中学校	大宮学園教育目標 「自他を尊重し、自ら学ぶ子どもの育成」 大宮中学校重点目標 「ふるさとを愛し、夢や希望をもって未来を切り拓く、心豊かでたくましい生徒の育成」 ～子どもたちの「がんばろう」という気持ちを引き出し高める指導を目指す～ １　夢や希望を持って未来を切り拓く能力と実行力の育成 ２　学習意欲を高める授業改善と家庭学習の定着 ３　健康な体と豊かな心の教育の充実 ４　信頼され、開かれた学校づくり ５　教職員の資質能力の向上 ６　大宮学園保幼小中一貫教育の推進
26 網野中学校	将来に夢と希望をもち、郷土を愛し、知・徳・体の能力を伸ばす生徒の育成を図る教育の推進 １　規範意識を醸成し、落ち着いた学校、落ち着いた授業により学力を付ける。 ２　未来を展望し、自ら未来を切り拓く力を付ける。 ３　思いやりをもち仲間とともに生きる、豊かな人間関係を築く力を育てる。 ４　自然・人・社会とつながり、郷土を愛する心を育てる。
27 丹後中学校	開校９年目となる教育活動を充実させ、保護者・地域から信頼される学校経営を行う。 生徒が「本気で本物に挑戦する」ための教育環境をつくり、自分の可能性を信じそれに果敢に挑み力を伸ばすことに専念させる。
28 弥栄中学校	１　全教職員で、生徒・保護者との信頼関係を築く。 ２　主体的に学び、たくましく心身を鍛え、人権尊重を基に人間性豊かな生徒を育む教育課程の編成と実施に努める。 ３　基礎的・基本的内容の指導の徹底と定着を図る授業づくりを進める。 ４　知識技能を活用し、自ら考え、判断し、表現する力を育んでいく。 ５　未来を拓くために主体的に進路選択ができる能力を育てる。
29 久美浜中学校	＜久美浜学園＞　指導の重点：学力向上 (1) 基礎・基本の徹底 (2) 主体的に学ぶ力の伸長（授業づくり） (3) 家庭学習時間の確保 ◇規範意識の醸成を基盤とし、当たり前のことが当たり前にできる学校、「命」「今」「仲間」を大切にする学校を目指す。 ◇久美浜学園保幼小中一貫教育の一層の推進により、指導観について共通理解を図り、系統的、組織的な教育実践を推進する。 １　「主体的・対話的で深い学び」を追求した授業の充実による学力の向上 ２　好ましい人間関係の構築と自己肯定感・自己有用感の向上 ３　不登校の未然防止と不登校（傾向）生徒の改善 ４　「久美浜学園学校運営協議会」を核とする地域力と学校力を統合した、地域ぐるみの子育て支援体制の確立 ５　新型コロナウイルスと共存した新しい生活様式の確立と「新しい教育の創造」

（別紙様式２）

令和４年度　峰山学園保幼小中一貫教育報告書

１　「目指す子ども像」、教育目標

【教育目標】
「自己肯定感を持ち、自分の将来を展望し、共に学ぶ子の育成」
【目指す子ども像】
「意欲を持って自ら学ぶ子ども（知）」
「思いやりのある子ども（徳）」
「進んで心と体を鍛える子ども（体）」

２　保幼小中一貫教育として解決を目指す重点課題、取組の柱とする内容

指導の重点「確かな学力の育成（授業研究）」「コミュニケーション能力の育成」「評価を見通した取組の充実」を各こども園・小・中学校の教育活動や校内研究・研修に位置付ける。

（１）確かな学力の育成

自己肯定感を高め、他者と関わりながら深く学ぶ幼児児童生徒の姿を実現するために、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた教育を土台にして、幼児期から中学校まで一貫した実践を進める。

（遊びや授業の研究）

※峰山学園では、「確かな学力」を「生きて働く知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」を総合したものと捉える。

ア　「主体的・対話的で深い学び」を実現する遊びや学習を進める。

①学びに関心を持ち、粘り強く取り組み、次につなげようとする主体的な学び
②他者との対話やかかわりをもとに考え、自分の考えを広げ深めようとする対話的な学び
③見方・考え方を働かせながら、関連付けたり情報を整理したり探究したりして問題を解決しようとする深い学び

イ　（小・中学校）タブレット等のＩＣＴ器機を効果的に活用する。

ウ　（小・中学校）目標から単元総括テストを作成し、それを踏まえた指導計画と授業設計に努める。

（２）コミュニケーション能力の育成

遊びや学習を通して、ことばによる伝え合いを軸とした学びや、他者との共感的人間関係を育成することなど、自立に向けて幼児期から中学校までの一貫した実践を進める。

ア　幼児児童生徒が安心できる「居場所づくり」（存在感・充実感）を進める。

イ　お互いを認め合う心の醸成を図る。

ウ　人とつながる楽しさを味わわせ、ことばで伝え合う力を育む。

（３）評価を見通した取組の充実

ア　学園評価・学校評価の結果に基づく学園経営の充実

イ　教育評価・指導評価の結果に基づく教育実践の改善指導の重点「確かな学力の育成（授業研究）」

３　保幼小中一貫教育の具体的な内容と評価

項目	内容	評価 （実践の過程・幼児児童生徒の姿・教職員の見方等）
幼児児童生徒の実態や課題、目指す子ども像や目標、方針等の共有方策	（１）学園内の全ての学校が、目指す子ども像・教育目標を共通化 （２）学園内の全ての学校が、学園経営方針を各学校の経営方針へ位置付け （３）学園内の全ての学校が、学園経営の課題・重	（１）児童生徒の実態や課題などや目指す子ども像、目標方針の共有について ○年度当初の研修会を集合型で実施し、峰山学園の幼児・児童・生徒実態から明らかにした経営方針を全教職員で確認し、運営できた。 ○児童・生徒の状況については、各会、部会で共通理解を図り、取組に生かしている。担任会でも、児童の状況について交流し、指導方法を学び合うことができた。 ○経営会議の中で研修の時間を設け、各校の重点目標や実践を交流する中で、学園の課題が明らかになり、学園の目標を具現化する方策について学びことができた。 （２）学校経営及び進行管理 ○経営会議を定期的に開催し、学園内の教育課題の把握・整理を行いながら、教育目標・目指す子ども像の実現を目指して経営を行うことができた。 ○経営会議で、運営会議、教育課程会議、生徒指導部会、学習指導部会の取組等を把握するとともに方向性を確認することができた。 ○1年担任会では、こども園の園長・担任が後半合流し、園

	点について各学校の経営方針へ位置付け	小連携を行った。こども園・小学校での指導を理解し、それぞれの指導に活かすことができた。 ○今年度から、共同学校事務室室長も経営会議に参加して学園の重点や取組を把握し、児童生徒の学習環境や学園予算の検討など、共同学校事務室の運営に活かすことができた。
就学前から中学校卒業までを見通して一貫した指導、教育課程	(1)　峰山学園の目指す子ども像を見通した指導と教育課程の作成 ア　自己肯定感を育てる授業づくり・生活づくり ・学習指導要領の趣旨を踏まえ、確かな学力の充実・向上のために、「主体的・対話的で深い学び」の実現による授業改善 ・GIGA スクール構想に基づき、授業展開の一部分としてICT利活用の推進及び学園内でのオンライン合同学習の可能性探究 イ　０期～Ⅰ期、Ⅰ期・Ⅱ期（汽水域を含む）・Ⅲ期の指導目標を踏まえた一貫した指導＜(0) Ⅰ～Ⅲ期における『目指す姿』一覧＞ ・小６児童の不安感や中１生徒の困り感の再検証…中１ギャップの捉え直し ・単元総括テストの作成と交流と検証 ・京丹後市保幼小中一貫教育モデルカリキュラムの積極的な活用 ・学力充実期間等 ・乗り入れ授業 ・小学校高学年での一部教科担任制 ・中１ふりスタ（略称　正式名称　中学校１年生集中振り返り学習） ・全ての学年でのふりスタ ・中学校体験授業（年２回） ・「５年生・６年生の心構え」 ・二分の一成人式（小学校４年生）、立志式（中学校２年生） ウ　保幼小の接続を中心とし教育課程の編成と一貫した指導 ・アプローチ・カリキュラム、スタート・カリキュラムの実践と検証 (2)　不登校・いじめの解消 ア「５・６年生の心構え」と各校の実態を踏まえて、積極的な生徒指導を行うとともに、生徒指導の３機能を生かした学級づくり・授業づくりについて研究	０期、Ⅰ期～Ⅲ期をより意識した指導を行うことを年度当初に確認した。「（０）Ⅰ～Ⅲ期における『目指す姿』一覧」を踏まえ、担任会で峰山学園の児童生徒に付ける力の検討を行ってきた。各校園では、職員室等に掲示することにより、教職員に共通理解が進み、一層、一貫性・系統性のある教育課程による指導につながってきていると考えられる。 (1) 児童生徒の実態や課題、目指す子ども像の共有 ○経営会議で決定したことを各校へ持ち帰り、全教職員に周知することにより、目指す子ども像の実 現に向けて実践を積み上げることができた。 (2)　就学前から中学卒業までを見通して一貫した指導の充実、教育課程編成 ○年間１０回の経営会議を実施し、連携を深め、10年間を見通した指導について取組を進め、保幼小中一貫教育を推進することができた。また、教育支援部会・こども園の参加の１年担任会・教育課程会議の取組で、園児・児童が付けた力を踏まえた接続を意識した支援を行った。 ○●こども園等から小学校へ、小学校から中学校への子どもに関わる情報については、個人情報であることを踏まえ、対応と内容については、毎年確認をしてより良いものにしていく必要がある。 　アプローチカリキュラム・スタートカリキュラムを改善し、園で付けた力(10 の姿)を生かした小学校での指導になるように、さらに研究・実践を継続する。１年担任会、教育課程会議で幼小連携について研究し、各校へ学びを深めたり実践につなげたりした。 ○指導の重点である確かな学力の育成を目指し、今年度から重点目標を変更し、「主体的・対話的で深い学び」を視点に、０期の「遊び」を加えて、各園、小・中学校で進めることができた。学習指導要領の趣旨を踏まえ、児童生徒が主体的に学びに向かう授業改善の視点を明確にして実践できた。 ○「峰中ギャップ」を意識して６年生の不安解消につなげていくために「中学校体験授業」２回、「部活動体験」２回（１回は希望制）を実施できた。 ○こども園の参観を予定していたが、コロナ感染症拡大により中止にした。こども園を参観し、１０年間のスタートである０期の実践を参観して、自分から人と関わるための環境設定や、思いや行動を引き出すために、どのようにことば掛けを行っているかを学びたい。次年度も、夏季研修と合わせて計画したい。 ○各校で積極的な生徒指導の取組として児童会・生徒会活動等だけでなく、日々、肯定的な評価や違いを認める指導を行っており、おおむね落ち着いた状況で生活できている。 ○アンケート実施・結果分析・活用、篠原講師による SNS 講演会等の取組をとおして、ＳＮＳに係る指導を小・中学校で進めることができた。今年度は、６月に講習会を実施でき、夏休み前の指導に活用できた。 ●家庭学習については、学びに向かう姿勢、自ら計画的に学ぶ具体的な方法を身に付ける等の視点をもち、各校で学習指導部作成の系統表の浸透を図る。小学校から中学校へのギャップを埋めるための方策を考えていく。さらに、小中一貫校 PTA との連携も強化し、家庭学習の習慣化を図る。 ●SNS にかかる指導については、児童生徒の実態を踏まえ、峰山学園ＰＴＡとの連携が必要である。 ○「夢・未来式」（二分の一成人式」「立志式」に取り組み、自分の将来を展望する子どもたちを育てることができてきている。今年度、「二分の一成人式」の名称を「夢・未来式」と変更した。第４学年をⅠ期の修了学年ととらえ、自分の成長・将来への展望について重点的に取り組むこと

	イ　不登校の未然防止に向けて組織的な取組を進める。 ・学園内で気になる子どもの実態交流を行い、幼児期・学童期・思春期の変化とその時期に大切な支援や指導について研究 ・各期で移行支援シートを丁寧に作成・引き継ぎ ・教育支援部会で具体的な事例研究（SC・SSW の専門的な見立てからの学び）	ができた。その方向性については、年度ごとに経営会議で確認し、各校の実情を踏まえ、学園としてねらいや趣旨を共通化して、育成すべき力の実現を目指す。 ●「５・６年生の心構え」は、令和３年度に変更して現在の内容になっている。内容を変更した趣旨を共有し、全員で確認をしながら指導を進めていく必要がある。 ○●令和４年度次世代型小・中・高連携外国語教育推進事業の取組を進め、３年間の研究をまとめることができた。指定校（峰山高等学校、峰山中学校、いさなご小学校、しんざん小学校）、協力校（峰山小学校、長岡小学校）として取り組んだ。課題として、全小学校実施の児童アンケートによると英語に苦手意識を持っている児童が多いことがわかる。今後も小・中英語教育の研究を進めていく。 ●アプローチカリキュラム・スタートカリキュラムは作成しているが、今後、「幼保小の架け橋プログラム」を反映したものにするため、経営会議で内容を整理し、教育課程会議で検討し、１年担任会で実践について研究していく。
幼児児童生徒、教職員の交流と協働	（１）目指す子ども像の実現・目指す教師像の意識化に向けた教職員の協働及び教職員の交流 ア　教職員の合同研修会・実践交流の実施 イ　授業づくりを通した研修会 ウ　担任会を通した研修 （２）「集団の中で豊かに人とかかわる力」や「コミュニケーション能力」を高めることを目的とした子どもの交流を図る行事等の計画・実施 ア　峰山中学校合唱祭 イ　部活動体験 ウ　合同授業・学びの交流等 エ　体育祭等 オ　「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業実践 カ　クリーンキャンペーン キ　SNS 講演会	○「主体的・対話的で深い学び」を推進するために、学習指導部が作成した「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、こども園、小・中学校で大切にする視点に沿って各小中学校ともに授業研究に取り組むことができた。授業研究等でも、この視点に沿って研修できた。 ○全教職員の研修会での実践研究及び各部会での実践交流を通して、教職員の交流を図ることができた。夏季研修会については、延期となり、１１月の秋季研修会でこども園、中学校の実践報告を行った。オンラインでつないだが、峰山小会場では、音声が不明瞭で伝わりにくかった。今後、オンラインで実施する場合は、事前の準備や方法を工夫する必要がある。 ○特別支援学級「ふれあい交流会」では、小学校１年生から中学生までが楽しめる内容が工夫され、中学生が中心となって進め交流できた。 ○●クリーンキャンペーン・部活動体験・体験授業・ふれあい交流会等、児童生徒が交流を通して中学校への不安を解消し自己肯定感を高めることができた。ペア活動などでは、相手のことを考えて行動する姿から中学生への「あこがれ」を感じることもできた。一方、目的とクリーンキャンペーンの内容がふさわしいのかどうか検討していく。 ○例年、年４回の全教職員の研修会を研究の節目として位置付け、「一貫した指導」について共有し、実践の成果を明らかにしてきた。学園の教職員が共通に学び方向性を再確認することができた。 ●ＳＮＳについては今後も、各小中学校で実態に合わせてＰＴＡと連携して取り組むとともに、次年度以降も小中一貫 PTA の年間計画にも組み入れて連携して進める。 ●担任会の協議内容として、算数科「単元総括テスト」の作成・実践交流し教材研究を行っている。算数の単元総括テストに特化することは改善し、教科の教材研究と交流を行う。5・6 年担任会には中学校からも参加しているので、Ⅱ期の終了を見通し「中１ギャップ」についてさらに研究していく。
家庭、地域社会との連携、情報発信	(1) 中学校区の家庭教育の課題（基本的な生活習慣や家庭学習習慣の確立、ほめて育てる家庭教育等）を踏まえた「峰山学園」ＰＴＡ統一目標の設定 (2)「峰山学園」ＰＴＡ統一目標に沿った校区全体及び各学校での具体的取組の計画・実施 (3)「峰山学園」学校評価に基づく学校関係者評価委員による評価の実施と学園の目標、教育活動の保護者・地域住民への積極的な情報発信 (4) 峰山町民が学園の教育活	○学園の課題（基本的な生活習慣や家庭学習習慣の確立、ほめて育てる家庭教育等）と連携した峰山学園ＰＴＡ統一目標を策定し、具体的に「峰山学園ＰＴＡみんなでおはよう運動及び交通安全指導」を実施できた。 ○保幼小中一貫教育学園コーディネーターの役割を明確にし、学園だより・ホームページ・リーフレット等での発信が定着してきており、学園の教育活動を保護者・地域に丁寧に広報することができた。 ○峰山学園地域コーディネーターの配置を受け、学校支援ボランティア等を活用し、話を聞いたり体験したりして地域の方から学ぶ機会を設けた。地域の方が学校教育活動に積

	動に積極的に参加し、支援できる仕組み（学校支援ボランティア　峰山学園学校運営協議会等）の機能化と充実	極的に参加できる取組を進められた。

4　今年度の成果と課題　改善方策

成果と課題	改善方策
≪成果≫ 1　児童生徒、教職員アンケート結果より ・峰山学園の保幼小中一貫教育の成果は顕著に現れ、峰山学園の児童生徒の課題解消や軽減等は着実に進んでいる。 2　峰山学園の教職員のアンケートから、確実に保幼小中一貫教育で目指している一貫した指導が浸透してきていることが窺える。今年度の重点は、「確かな学力」「コミュニケーション能力の育成」ともに、0 期の「遊び」を位置づけ、こども園・各小・中学校の教員が学園の授業改善の目標を意識して研究を進めている状況が確認できた。 3　学園経営及び進行管理について ・経営会議が運営会議、教育課程会議及び生徒指導部、学習指導部などを統括しながら進められた。 ・担任会の実践を進めるためにより機能的な組織体制にして、担任会がより授業づくりの実践推進を担うよう学習指導部と連携できるようにした。 ・担任会の活動内容（総括テスト、学習の振り返り）を明らかにし、授業改善や学力向上に繋がる実践を取り組むことが出来た。 4　10 年間を見通した一貫した取組について ・「目標と指導と評価の一体化」を具体化するための実践を担任会に位置付け学習指導部と連携しながら単元総括テストの作成等に取り組むことができた。 ・「主体的・対話的で深い学び」を実現するために大切にする視点に沿って、授業研究会等での実践交流を通して、授業改善を図ることができた。 ・10 年間を見通した連携・一貫した指導となるよう分掌や分掌の任務の改善を進める。特に、「（0）Ⅰ期～Ⅲ期に目指す姿」を強く意識をし、各期に身に付けさせる力を明らかに指導することができた。 ・児童生徒に基礎基本の力を身に付けさせるため、小４ふりスタ・６年生春季宿題の共通化・中１ふりスタ等の取組を継続・充実させることができた。	○担任会の取組の継続・発展 担任会…今年度の体制を維持し次の内容に取り組む。 ①学年の学習内容の復習のための課題づくり ②算数の単元総括テストに特化することを改善し、教材研究を他教科にも広げ指導力の向上を図る。 ③０期～Ⅲ期の指導目標を踏まえた指導の充実を図る。 ④5・6 年生の担任会には中学校も参加しているため、中学校の実態から「中１ギャップ」解消に向けた指導を検討する。 ○小４（Ⅰ期とⅡ期の節目）に焦点化して研究推進してきたが、今後それぞれの節をより確かなものにするために研究・実践の幅を広げていく。6・3 制のもとで定着している教育課程の意識や行事・取組等を検討し小中一貫した教育課程の無理のない移行を図る。 ○こども園から小学校への連続性、効果的な接続の在り方について、より一層重点的に取り組むため、「幼保小架け橋プログラム」を反映したアプローチカリキュラム、スタートカリキュラムとなるように見直す。 ○教員の研修会 授業づくりを中心とした協議を行い、小中学校で指導力の向上を図る。こども園の参観を行い、0 期のスタートにおいて大切にしていることを理解する。 ○令和５年度の目指す子ども像・教育目標・目指す教師像について、保幼小中一貫教育推進の手引きをもとに検討を行う。 【令和５年度】 1　目指す子ども像 意欲を持って自ら学ぶ子ども（知） 思いやりのある子ども（徳） 進んで心と体を鍛える子ども（体） 2　教育目標 「自己肯定感を持ち、自分の将来を展望し、共に学ぶ子の育成」 3　目指す教師像 教育的愛情と、使命感・情熱に満ちている教師 人間的魅力にあふれている教師 高い「専門性」と「授業力」を持ち、確かな学力をつけることができる教師 児童生徒、保護者、同僚、地域の人から信頼される教師 「京丹後」への理解と愛情と、国際的な視点に立った教育を進めることができる教師
・各校で積極的な生徒指導の取組として児童会・生徒会活動等だけでなく、幼児児童生徒が安心できる「居場所」づくりを進め、お互いを認める心の醸成を図った。また、「夢・未来式」（二分の一成人式）「立志式」にも取り組み、成長を実感し自分の将来を展望する子どもたちを育てることができてきている。 ・「主体的・対話的で深い学び」を実現するためにこども園・小学校・中学校で大切に	4　学園経営方針 （1）一人一人が自己肯定感を持ち、いきいき活動する学園【児童・生徒】 ア　自分の将来を展望し、意欲を持って学ぶことができる取組を進める。 イ　自分の思いや考えが表現でき、共に学び、思いやることができる取組を進める。 ウ　粘り強く挑戦し、自らの心や体を鍛えることができる取組を進める。 （2）「中学校卒業時の子どもの姿」に全教職員が責任を持つ学園【教職員】 ア　児童生徒の願い・希望・悩みに正面から向き合い、共感的理解と指導に努める。

する視点に基づき、各校で実態に応じた授業づくりに関わる研究を進め、秋季研修会で小学校２校の授業研究会を行った。具体的な児童生徒の姿から、よりよい授業づくりの在り方について学び合うことができた。協議を通して目指したい指導生徒の姿や授業づくりで大切にしたい視点を明確化したり共有化させたりすることが出来た。

・保幼小中一貫教育コーディネーターの役割を明確にし、学園だより・ホームページ・リーフレットの作成を行い、学園の教育活動を保護者・地域に丁寧に広報することができた。

・不登校の未然防止に向けて、学園内で気になる子どもの情報交流をすることで、幼児期・学童期の過去の様子や家庭の情報などを得ることができ支援や指導に繋がった。

・SNS 講演会については、児童生徒向けと保護者向けを実施できた。主催、運営等の役割分担が整った。

・ペアやグループでの学習形態を計画的に取り入れることで、子ども達のつながりを育み、学習意欲の向上や不登校の未然防止につなぐことができた。

≪課題≫

１　令和５年度学園経営に向けて

（１）組織体制及び運営上の改善

・10 年間を見通した連携・一貫した指導となるよう分掌や分掌の任務の改善を進める。特に、０期～Ⅲ期に目指す児童生徒像を目指した指導をさらに進める。

（２）令和５年度に向けての重点的な課題・取組の方向

【教育目標・目指す子ども像・学園経営方針】

・令和５年度についても、学園として教育目標「自己肯定感を持ち、自分の将来を展望し、共に学ぶ子」の実現に向けて、ＰＤＣＡサイクルで、学園経営を行っていく。

【学園指導の重点】

・授業研究については、学習指導部会が中心となって「主体的・対話的で深い学び」を実現するために大切にする視点を基に行う。小中全教職員が授業研究にかかわるためにも、各校で視点を明確にした実践を積み上げる。こども園においても、遊びの中で育んでいく。

・夏季研修については、教職員の指導力量を高めていく取組の大きな節としていく。特

イ　学びを深める授業・生活の創造に取り組み、専門性の向上を図る。

ウ　10 年間を見通して、一貫性・系統性のある指導を行う。

エ　互いに学び合い、協働的な教育活動を展開する組織を構築する。

オ　保護者や地域の人達と連携して児童生徒の社会的自立を図る指導を進める。

（３）保護者・地域に信頼される学園【保護者・地域】

ア　ＰＴＡ・地域と連携した自己肯定感を高める取組を進める。

イ　保護者・地域へ双方向の情報発信を行う。

ウ　市民が学校の教育活動を積極的に支援する取組を進める。

○　学園指導の重点

指導の重点「確かな学力の育成（授業研究）」「コミュニケーション能力の育成（生徒指導・特別活動」「評価を見通した取組の充実」を各こども園・小・中学校の教育活動や校内研究・研修に位置付ける。

（０）Ⅰ～Ⅲ期における「目指す姿一覧」を意識した指導を今後も積極的に行う。

（１）確かな学力の育成

自己肯定感を高め、他者と関わりながら深く学ぶ幼児児童生徒の姿を実現するために、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた教育を土台にして、幼児期から中学校まで一貫した実践を進める。(遊びや授業の研究)

※峰山学園では、「確かな学力」を「生きて働く知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」を総合したものと捉える。

ア「主体的・対話的で深い学び」を実現する遊びや学習を進める。

①学びに関心を持ち、粘り強く取り組み、次につなげようとする主体的な学び

②他者との対話やかかわりをもとに考え、自分の考えを広げ深めようとする対話的な学び

③見方・考え方を働かせながら、関連付けたり情報を整理したり探究したりして問題を解決しようとする深い学び

イ（小・中学校）タブレット等のＩＣＴ器機を効果的に活用する。

ウ　（小・中学校）目標から単元総括テストを作成し、それを踏まえた指導計画と授業設計に努める。

（２）コミュニケーション能力の育成

遊びや学習を通して、ことばによる伝え合いを軸とした学びや、他者との共感的人間関係を育成することなど、自立に向けて幼児期から中学校までの一貫した実践を進める。

ア　幼児児童生徒が安心できる「居場所づくり」（存在感・充実感）を進める。

イ　お互いを認め合う心の醸成を図る。

ウ　人とつながる楽しさを味わわせ、ことばで伝え合う力を育む。

（３）評価を見通した取組の充実

ア　学園評価・学校評価の結果に基づく学園経営の充実

イ　教育評価・指導評価の結果に基づく教育実践の改善

○　保幼小中一貫教育の具体的な内容

１　児童生徒の実態や課題、目指す子ども像や目標方針の共有に向けて

（１）学園内の全ての学校が、目指す子ども像・教育目標を共通化

（２）学園内の全ての学校が、学園経営方針を各学校の経営方針へ位置付け

（３）学園内の全ての学校が、学園経営の課題・重点について各学校の経営方針へ位置付け

２　就学前から中学校卒業までを見通して一貫した指導、

に、保幼小中連携に焦点を当てた取組とするため、こども園の参観を実施する。 ・タブレットの活用が幅広く図られ「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指して授業改善が行われた。今後はさらなる効果的な活用を推進する。 ・「確かな学力の育成」「コミュニケーション能力の育成」では、人とつながる楽しさを味わわせ、ことばで伝え合う力を育む実践を進める。 ・不登校の解消に向けて、今年度の取組を継続するとともに、関係機関との連携を更に深め、個に応じた対応から社会的自立につなぐ指導を展開する。 ・生徒指導部会では、各校で取り組まれている積極的な生徒指導の取組を交流し、コミュニケーション能力を育成し、豊かな人間関係の構築を目指す。同時に、指導者として各学年・発達段階に応じてそのためにどのような手立てが必要か検討していく。 ・「５・６年生の心構え」については、令和3年度に内容を修正した趣旨を共通理解し、指導に当たる。 ・特別支援を要する生徒が繰り返し問題行動を起こすなどの特徴が見られる。指導や支援の方法をより一層工夫・連携していく必要がある。 ・学園評価について、方針に基づいて早い段階から、評価の計画・見通しを持ち、学園学校運営協議会での評価により指導の改善を図る。 ・担任会においては、算数の単元総括テストに特化することを改善し、教材研究と交流を行う。特に５・６年担任会には中学校からも参加しているため「中１ギャップ」について実態交流し、解消できるよう検討していく。 【保幼小中一貫教育の具体的な内容】 ・０期・Ⅰ期～Ⅲ期の実践を明確にし、小中一貫教育の姿を確認する。	教育課程 （1）峰山学園の目指す子ども像を見通した指導と教育課程の作成 ア　自己肯定感を育てる授業づくり・生活づくり イ　汽水域を中心とした教育課程の編成と一貫した指導 ・小６児童の不安感や中１生徒の困り感の再検証 峰中（中１）ギャップの捉え直し ・京丹後市保幼小中一貫教育モデルカリキュラムの積極的な活用 ・学力充実期間等 ・乗り入れ授業 ・小学校高学年での一部教科担任制（外国語科） ・中１生集中振り返り学習 ・全ての学年でのふりスタ ・中学校体験授業（年２回） ・「夢・未来式」（二分の一成人式・小４）、 立志式（中２） ウ　０期Ⅰ期～Ⅲ期の目指す姿を達成できる指導について協議、実践していく。 ・「小中学校で共通確認する指導の視点」について見直しを行う。 ・「５・６年生の心構え」については、児童生徒の実態を踏まえ、検討を継続していく。 エ　園小接続を中心とした教育課程の編成と一貫した指導 ・アプローチカリキュラム・スタートカリキュラムの実践と検証 ３　子ども、教職員の交流と協働 （1）「目指す子ども像」の実現・「目指す教師像」の意識化⇒教職員の協働及び教職員の交流 ア　教職員の合同研修会・実践交流の実施 イ　授業を通した研修会 ウ　担任会を通した研修 （2）「集団の中で豊かに人と関わる力」や「コミュニケーション能力」を高めることを目的とした子どもの交流を図る行事等の計画・実施 ア　峰山中学校合唱祭 イ　部活動体験 ウ　合同授業・学びの交流等 エ　峰山中学校体育祭 オ　「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業実践 カ　学校や地域の一員として主体的に参加する取組 キ　クリーンキャンペーン ク　SNS 講演会（峰山学園主催、運営：運営会議・峰山学園生徒指導部） ４　家庭、地域社会への積極的な情報発信 （1）峰山学園学校運営協議会による評価の実施と学園の目標、教育活動の保護者・地域住民への積極的な情報発信 （2）中学校区の家庭教育の課題（基本的な生活習慣や家庭学習習慣の確立、ほめて育てる家庭教育等）を踏まえた「峰山学園」ＰＴＡ統一目標の設定 （3）「峰山学園」ＰＴＡ統一目標に沿った校区全体及び各学校での具体的取組の計画・実施 （4）学園の教育活動に支援体制（学校支援ボランティア等）の機能化と充実 （5）SNS 講演会（保護者向け）については、小中一貫校 PTA の取組として位置付け、各校 PTA の計画等にも組み入れる。地域にも発信し地域と連携した取組に広げていく。

（別紙様式２）

令和４年度 大宮学園保幼小中一貫教育報告書

１　「目指す子ども像」、教育目標

（１）教育目標
　　自他を尊重し、自ら学ぶ　子どもの育成
（２）目指す子ども像
　○ 意欲的に学び、チャレンジする子ども（知）
　○ 自他を大切にし、思いやりのある子ども（徳）
　○ 心身を鍛え、活動的な子ども（体）

２　保幼小中一貫教育として解決を目指す重点課題、取組の柱とする内容

※大宮学園を支えるのは「人権教育」そして「ことばの力」の育成
（１）確かな学力の育成：「言語活用カリキュラム」の活用
　①基礎学力の向上を目指した授業改善（授業づくり）
　②小中で連携した「主体的・対話的で深い学び」の実現による授業改善（授業づくり）
　　・「主体的・対話的で深い学び」を通して、「ことばの力」「思いやる心」「つながる力」を育成する授業研究を充実。
　　・Ⅰ期・Ⅱ期・Ⅲ期についての保幼小中一貫教育授業づくり課題を焦点化し、大宮第一小学校研究指定終了（令和４年度）までは、年間１校（令和３年度は大宮南小学校、令和４年度は大宮中学校）で実施
　③「ことばの力」の育成（言語活動の充実）を目指した授業改善（授業づくり）
　　・言語活用カリキュラムの積極的な活用を年間を通して進める。（学力充実部会、担任会）
　④保幼小の接続のためのアプローチプログラム・小１スタートカリキュラムの自学園化
（２）人権意識の育成：「人権教育カリキュラム」の活用
　①人権教育の理念に基づく「自他を大切にする心」を育成するための教育活動の充実
　　・全ての教育活動で「ことばの力」「思いやる心」「つながる力」の育成し、そのための授業づくりを推進する。（各教科指導で３つの力を育成する指導を充実させる。）
　　・特に、授業や特別活動等を通して、「話合い活動」の充実を図る。
　②人権意識を育成するための人権学習の充実
（３）ＩＣＴの積極的活用も含めた連携・体験活動の充実
　①ＩＣＴを活用した効率的・効果的な連携教育活動・体験活動の充実
　　・新型コロナウイルス感染症の流行状況を見定めながら追及
　②体験活動を通して「ことばの力」「思いやる心」「つながる力」の育成
　③効率的・効果的な共通した学校のきまり（学習・生徒指導・家庭連携）
　④丹後学・キャリア教育の視点を踏まえた夢・未来式（小４・中３）の実施
（４）目指す子ども像の実現を見通した教職員の交流と協働
　①学園の教職員が確実に出会い、話し合う機会の確保
　②担任会の充実
（５）家庭、地域社会への啓発、情報発信
　①ホームページ、たより等を活用した情報発信
　②大宮学園の家庭教育の課題を踏まえた「大宮学園」ＰＴＡ・保護者会の協働
　③家庭教育委員会による「家庭のやくそく」の継続と啓発、親のための応援塾の継続
　④大宮学園学校運営協議会での学園教育環境づくりの推進
　⑤「大宮学園」学校評価の実施と保護者・地域住民への啓発

３　保幼小中一貫教育の具体的な内容と評価

項目	内容	評価 （実践の過程・幼児児童生徒の姿・教職員の見方等）
幼児児童生徒の実態や課題、目指す子ども像や目標、方針等の共有方策	(1)　学園内の全ての学校園所が、教育目標、目指す子ども像を共通化する。 (2) 学園内の全ての学校園所が、学園経営計画を各校の経営計画へ位置づける。 (3) 学園内の全ての学校園所が、学園の子どもの実態・課題、学園重点方針等を各校の経営計画へ位置づける。 (4)　学園保幼小中一貫教育推進部会による実践研究成果を各校に波及させる。	(1)　学園教育目標及び目指す子ども像に向けて、学園内の２園所、３校での共通化に取り組んだ。 (2)　学園経営計画を各園所、学校の経営計画に位置づけ、経営の充実に取り組んだ。 (3) 学園教育課題、各会議・部会の推進状況を把握し、学園経営を統括し、一貫した教育指導・活動の充実に努めた。 (4)　最大の課題となる不登校について、共通認識と連携の在り方について協議を重ね、指導支援に生かした。特に、教育支援部会で事例研究を通して不登校への理解と支援の在り方について研修を積み重ねることができた。 (5)　引き継ぎシートを活用した児童生徒の支援の引き継ぎを丁寧に行うとともに、ＳＣやＳＳＷの活用を進めた。
就学前から中学校卒業までを見通して一貫した指導、教育課程	(1) 大宮学園教育課程の編成 ①汽水域指導プログラムの推進等 ・小中学校での乗り入れ授業の計画・実施（加配の活用） ・小学校５・６年での一部教科担任制 ・中学校授業体験（年２回予定～実技教科と五教科） ②Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期の学習への円滑な接続 ・アプローチプログラム、小１スタートカリキュラム（５歳児担任・小１年担任） ・夢・未来式の実施（小４・中３） ・小４・中１ふりスタ ・中学校定期テスト模擬体験 ・春季休業中の共通宿題（小６） ③家庭学習の充実 ・家庭学習の統一手引き ・家庭学習がんばり旬間 (2) 学力充実向上に関する取組の進行管理 ①学力調査と分析 ②学力向上のための授業充実・授業力向上 (3) 生徒指導・教育相談に係る情報の共有と連携 ①小学校５・６年の心得、共通の生活の決まり ②情報モラル教室	(1) 大宮学園教育課程の編成について ①汽水域指導プログラムの推進等について ・小中連携加配の乗り入れ授業（理科）と英語専科教員による外国語の授業を実施し、児童の実態把握や指導に効果があった。 ・人権教育加配が小学校での学習補助にあたることで、児童支援や児童の状況把握に効果があった。 ・体験入学や授業体験の実施により、入学への楽しみや期待につなげることができた。 ②Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期の学習への円滑な接続について ・保園と小学校との連携のもと、小１プロブレムの解消に向けての取組を行うことができた。 ・小４と中３で、夢・未来式に取り組んだ。 ・小６対象中学校定期テスト模擬体験（数学）を実施し、中学入学後のテストに係る不安解消に向けて取り組んだ。 ③家庭学習の充実について ・家庭学習の手引き、家庭学習がんばり旬間により、家庭学習習慣の向上に取り組んだ。 (2) 学力向上に関する取組の進行管理について ①学力充実部で学力分析を行うとともに、視点を明らかにした大宮学園授業研究会を行い、授業づくりについての提起等、さらに具体化することができた。 ②教科指導の連携・接続を目指し、担任会、小中

	③保幼小中連携シート (4) モデルカリキュラムに係る推進 ①モデルカリキュラムの研修 ②モデルカリキュラムの年間指導計画への位置づけ	連携による指導研究に取り組んだ。担任会を通して「言語活用カリキュラム」の見直しを進めた。今後も普段の授業に位置づけ継続して指導する。 ③学園教育課程会議・学力充実部が中心となり、中学校での授業公開とその後の授業研究会で小・中学校教員で話し合う機会を設けた。「主体的・対話的で深い学び」の実現による授業改善(授業づくり)、中でも、「聞くこと」「話し合うこと」等、小中学校の教員で交流した。 ④大宮第一小学校の実践からも、話合い活動を通してこどもたち自身が考え、主体的に取組「ことばの力」を育成（言語活動の充実）することが学級の安定化や、学習意欲につながると学ぶことができた。 (3) 生徒指導・教育相談の一貫・接続 ①学園として小中各校、一貫校ＰＴＡで情報モラル学習を実施し、ＳＮＳの安全な利用について学ぶことができた。 ②事例研究、引き継ぎシート等の充実に取り組めた。 (4) モデルカリキュラムに係る推進について ①学園としてモデルカリキュラムをもとにした授業の実施を行った。 ②今後もモデルカリキュラムに係る研究を推進していく必要がある。
幼児児童生徒、教職員の交流と協働	(1) 連携・体験活動 ①人権意見発表会（学校毎） ②合唱祭・にこにこ合唱団の取組 ③体育祭（招待状） ④部活動体験（11 月予定） ⑤体験授業（年２回〈６・11 月実施〉予定） ⑥花いっぱい運動（学校毎） (2) 幼児・児童・生徒交流活動 ①児童会・生徒会交流活動 ②挨拶運動「ハイタッチモーニング」・ニコニコの日の取組 ③生徒会アドバイス ④児童会・生徒会スローガンの見直し ⑤大宮こども園児と大宮中生との合同非難訓練 (3) 教職員の交流と協働 ①担任会（小小担任会、小１担任と５歳児担任、小６担任と中１担任） ②授業研究に向けた取組の推進	(1) 連携、体験活動、幼児・児童・生徒交流について ①コロナ感染防止による連携・体験活動の精選や変更を行わざるをえなかった。（合唱祭は中学校のみで実施、体育祭活動での交流は園所と中学校で交流） ②挨拶運動（ハイタッチモーニング）、部活動体験等、状況を判断しながら実施できた。 (2) 教職員の交流と協働について ①学園の教職員が確実に出会い、話し合う機会の確保を目指したが、実際各会議や担任会のほかは大宮中学校での授業研究会後の分散会だけとなった。（予定していた子ども園・保育所の公開は中止とした。） ②３部会での現状分析、実践交流に取り組んだ。 ③事務部会では共同学校事務室として協働が進められ、大きな成果があった。 ④担任会を年間３回計画し、ミッションをもって取り組んだが、うち２回は計画と評価であるため、なかなか実のある取組になりにくかった。

	③合同研修会・実践交流会の実施	⑤保幼小中教員の交流は一定進んだが、勤務の関係で保育所・こども園の先生方との交流が難しい。
家庭、地域社会との連携、情報発信	(1) 家庭教育課題を踏まえた「大宮学園」ＰＴＡ統一目標の策定 (2) 大宮学園ＰＴＡ家庭教育委員会による「家庭のやくそく」の取組 (3) 大宮学園ＰＴＡ統一目標に沿った校区全体及び各学校での具体的取組の計画と実施 (4) 大宮学園学校運営協議会と連動した具体的取組（見守りとセットのあいさつの取組） (5) 「大宮学園」学園評価の実施と家庭及び地域への啓発	(1) 大宮学園ＰＴＡの目標策定とともに、配布済の「令和版家庭の心得」を啓蒙することができた。 (2) 大宮学園ＰＴＡ事業計画に基づき、「地域でおはよう 挨拶運動」や「情報モラル学習会」等、計画的に実施することができた。 (3) 大宮学園学校運営協議会との協働を進め、「見守りとセットのあいさつの取組」を広く大宮地域に波及できるよう取組を進めた。特にコーディネーターが中心となり丁寧な連携が進められ、会員の皆様の思いや期待を運営に生かすことができた。 (4) 学園だより、ホームページの更新等で、教育活動の発信に努めた。 (5) 学園評価を実施し、今後に向けた評価をいただいた。

4　今年度の成果と課題　改善方策

成果と課題	改善方策
【成果】 (1) 学園教育課題、各会議・部会の推進状況を把握し、学園経営の統括、一貫した教育指導・活動を充実させることができた。また、年度当初、大宮学園教育推進計画を策定し、また各会議のミッションを明確にすることができ、限りある部会ですることが明確になった。 (2) 経営会議の方針のもと企画運営会議が運営し、教育課程会議等各会議で一致して進めるシステムが機能した。 (3) すべての教育活動で「ことばの力」「思いやる力」「つながる力」の育成に向けて取組を推進することができた。 (4) 視点を明確にした授業研究会や公開を通して、幼児から小中学校への接続やその意義、授業研究の一貫性等大きな学びがあった。 (5) 保幼小中の不登校状況である園児や児童生徒、配慮や支援の必要な子どもの状況を共通認識し、支援の在り方を探ることができた。 (6) 不登校及び不登校傾向児童生徒に絞って事例研究を進めることで不登校に陥る背景の多様さと小中学校で配慮すべきポイントについて共通理解を進めることができた。 (7) 学園の経営会議（校長）、運営会議（教頭）の両方で担当指導主事から具体的な資料を基に不登校の状況について確認する機会が設けられることで、	【課題】に対して (1) 学園評価を受け、保幼小中一貫教育の３つの目的の共通理解を丁寧に行い、その共通理解に基づき、大宮学園保幼小中一貫教育の目標、教育指導の重点、教育指導・活動の充実を図る。 ①市の教育課題改善のため、保幼小中一貫教育の目的についての共通理解を当初全体会で確実に行う。 ②その具現化に向け焦点化した大宮学園保幼小中一貫教育の重点策定を行う。 ア　確かな学力の育成に向けて、改定した「言語活用カリキュラム」のさらなる活用・定着を図る。 イ　人権意識の育成に向けて、「人権教育カリキュラム」を実施する。また、実施に向けた協議を大切にする。 ウ　ＩＣＴの積極的活用も含めた連携・体験活動を充実させる。 エ　目指す子ども像の実現を見通した教職員の交流と協働を進める。 (2) 大宮学園保幼小中一貫教育の目標・教育指導の重点を踏まえ、一貫した教育指導・教育活動を一層充実させるための学園経営の充実を図る。 ①教職員の保幼小中一貫教育の意識を向上させる。事業の継続から指導の一貫性へのステップアップを図る。特に保幼からの接続について継

教育支援部を中心として事例研究を通して不登校児童生徒の理解と支援について研究を深めることができた。

(8) 校種間連携の必要性への意識が高まり、大宮中学校の小学校在籍時の欠席状況の情報提供（未然防止の観点）及び不登校傾向となった生徒に絞った小学校在籍時の学習の状況や欠席状況の情報提供（早期対応の観点）が進んだ。

(9) 大宮学園学校運営協議会では、コロナ禍の中、なかなか取組ができなかったが、「あいさつ」を中心に実行ある取組が進められた。（見守りとセットのあいさつの取組）

(10) 新型コロナ感染防止の視点でいろいろな対応が求められる中、経営会議を中心として情報を共有し、共通認識を持って学園経営を行うことができた。

(11) コロナ禍ではあったが、小中連携事業の他、小小連携、幼保連携も可能なことを実施でき、継続した取組にできた。

【課題】

(1) 学園評価を受け、保幼小中一貫教育の３つの目的の共通理解を丁寧に行い、その共通理解に基づき、大宮学園保幼小中一貫教育の目標、教育指導の重点、教育指導・活動の充実を図る。

(2) 大宮学園保幼小中一貫教育の目標・教育指導の重点を踏まえ、一貫した教育指導・教育活動を一層充実させるための学園経営の充実を図る。

(3) 各校で不登校への対応を進めているが、結果として小中学校で学校に来にくくなる子が毎年出ている。不登校・特別支援教育・就学指導に係る学園課題に対して、さらに実践研究を積み重ねる。

(4) 教育支援が必要な幼児・児童生徒や、特別支援及び教育相談における校種間連携の仕組みを整え、校種間の円滑な接続を推進する。

(5) 大宮学園学校運営協議会（学園コミュニティ・スクール）との協働をさらに進め、より地域とともにある学園（学校）を目指すとともに、地域に根差していくための工夫を考える。

(6) 各会議・部会等、継続して開催できるものは幼児児童生徒の継続した指導について協議、取組でき、大きな成果につながっているが、担任会等回数が限られており、指導の継続性も含めて難しく検討が必要である。

続して意識を高める取組を進める。（他市町からの転入者や新規採用者等の増加に伴い丁寧な説明を行う必要がある。）

②各校持ち回りで授業研究会を開催し、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した授業改善について、焦点を絞って研究を推進する。授業研究会を通して、普段の授業で大切にすることを学園全体で確認し、幼児児童生徒の変容につながる継続した指導を行う。

③大宮学園の重点内容「人権教育」と「ことばの力」の育成を進める上で「言語活用カリキュラム」と「人権教育カリキュラム」を日々の授業の中で生かしていく。

④連携教育活動を効果的・効率的に進める。

⑤担任会・教科部会等を効果的・効率的に進める。

(3) 各校で不登校への対応を進めているが、結果として小中学校で学校に来にくくなる子が毎年出ている。不登校・特別支援教育・就学指導に係る学園課題に対して、さらに実践研究を積み重ねる。

①児童生徒の円滑な接続のための個別記録の活用及び不登校・不登校傾向児童生徒に特化した事例研究を継続して行う。

②教育相談、不登校、家庭支援に係る情報交流と指導の在り方について継続して研究を進める。

(4) 教育支援が必要な幼児・児童生徒や、特別支援及び教育相談における校種間連携の仕組みを整え、校種間の円滑な接続を推進する。

・保幼小連携事業・保幼中連携事業・小小連携事業・小中連携事業を通した担任会の充実を図る。

(5) 大宮学園学校運営協議会（学園コミュニティ・スクール）との協働をさらに進め、より地域とともにある学園（学校）を目指すとともに、地域に根差していくための工夫を考える。

・大宮学園学校運営協議会の来年度の方向性を踏まえ、来年度当初の協議会で具体的な提案を行い、活動を通してより地域とともにある学園（学校）を目指す。

(6) 各会議・部会等、継続して開催できるものは幼児児童生徒の継続した指導について協議、取組でき、大きな成果につながっているが、担任会等回数が限られており、指導の継続性も含めて難しく検討が必要である。

・新型コロナ感染防止を徹底し、経営会議が各会議・部会の進捗状況を把握し、事業や取組を推進していく。

（別紙様式２）

令和４年度　網野学園保幼小中一貫教育報告書

１　「目指す子ども像」、教育目標

【目指す子ども像】
あ：明るく元気に進んで学ぶ子　　【知】意欲的に学習に取り組む子ども
み：みんななかよく支え合う子　　【徳】規範意識をもち、仲間と支え合う子ども
の：のびのび生き生きやりぬく子　【体】粘り強く心身を鍛え、やり抜く子ども
【教育目標】
将来に夢と希望をもち、郷土を愛し、知・徳・体の能力を伸ばす子どもの育成を図る教育の推進

２　保幼小中一貫教育として解決を目指す重点課題、取組の柱とする内容

(1)　確かな学力の育成
　ア　主体的に学ぶ力とコミュニケーション能力の育成
　　(ｱ)　生徒指導の三３機能を生かした「わかる」「できる」授業の実現
　　(ｲ)　指導と評価の充実（指導と評価の一体化）
　　(ｳ)　ICT の活用による授業改善
　　(ｴ)　Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期のゴールの姿となる指標づくり
　　(ｵ)　認知能力と非認知能力とを一体的にはぐくむ研究と実践
　イ　　補充学習の充実
　　(ｱ)　基礎基本を定着させるための個別補充学習
　ウ　　家庭学習の充実
　　(ｱ)　授業とつながる自主的な家庭学習の実現　　(ｲ)　家庭と連携した学習習慣の定着の取組み
　　(ｳ)　家庭学習の指標づくり
(2)　規範意識の醸成
　ア　学習規律の確立　　イ　生活習慣の確立
(3)　豊かな人間性の育成
　ア　自尊感情の醸成　　イ　コミュニケーション能力の育成　　ウ　将来を展望する力の育成

３　保幼小中一貫教育の具体的な内容と評価

項目	内容	評価 (実践の過程・幼児児童生徒の姿・教職員の見方等)
幼児児童生徒の実態や課題、目指す子ども像や目標、方針等の共有方策	ア　学園内の全ての学校園所が、教育目標、目指す子ども像の共通化 イ　学園内の全ての学校園所が、学園経営方針・目指す子ども像の経営方針へ位置付け ウ　学園内の全ての学校園所が、「これだけは！」の各学校園所の経営方針へ位置付け	○随時事務局会議を開催することで円滑な経営会議の進行管理を行うことができた。 ○学園経営の基本方針に基づいた「重点的な取組み内容」「行動連携」を具現化するために、経営会議で確認したことを、各会議・部会等で年間計画に沿って取り組み、目指す子ども像の実現に向けて実践を積み上げることができた。 ○学園評価アンケートを実施・分析を行い、次年度の計画の改善に活かすことができた。 【網野学園児童生徒アンケートより】 児童生徒アンケート肯定率80%以上の項目数 小１（19/19）小２（16/19）小３（15/19） 小４（12/19）小５（13/20）小６（18/20） 中１（14/20）中２（13/20）中３（16/20） 概ね肯定的に捉えている学年が多い。 ・中学校は授業規律が身に付いてきている。自分で考え行動する力に繋がっており学校としての指導や取組みが成果として表れている。 ＊学校のきまりを守る。 １年:100%　２年:100%　３年:98% ＊時間を守る

		１年:96%　２年:99%　３年:97% ＊服装や姿勢 １年:90%　２年:100%　３年:96% ・小学校においては、学年間、各学校間の差が見られる。 ○「網野学園保幼小中一貫教育だより」「網野学園保幼小中一貫教職員だより」「網野学園学校運営協議会だより」を通して、各学校園所・各部会・学校運営協議会の取組を共有することができた。
就学前から中学校卒業までを見通して一貫した指導、教育課程	ア　不登校の解消に向けて ・「未来を拓く学校づくり」推進事業研究と連動した取組み ・全ての子どもにとって居場所となる魅力ある学校づくり ・早期発見、早期対応 ・社会的自立を目指した取組み ・組織的な取組（ICT の活用、関係機関との連携、保護者との心の安定） イ　０期、Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期の指導目標を踏まえた系統的な指導と「未来を拓く学校づくり」推進事業に係る研究推進 ・Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期のゴールの姿となる指標づくり ・「認知能力」と「非認知能力」を一体的にはぐくむ一貫した教育に係る研究 ・学力向上システムプログラムの見直しと活用 ・学力充実月間 ・家庭学習の手引きの活用・家庭学習がんばり週間の取組 ・６年生中学校授業体験 ・６年生部活動体験 ・６年生単元総括テスト ・６年生学年末テスト ・６年生春季休業中の課題 ・中１ふりかえり集中学習 ・小４ふりかえり学習 ・京丹後市保幼小中一貫教育モデルカリキュラムの積極的な活用 ウ　落ち着いた環境をつくるための規範意識の醸成 ・「これだけは！」「これだけは！」（授業編）の取組みの推進 ・生徒指導・教育相談に係る情報共有 ・乗り入れ授業、小小連携授業、小中連携授業 ・アプローチプログラム・スタートカリキュラムの検証・改定 ・長期モデルプランアプローチプログラム・スタートカリキュラムの検証 ・まなびスタート調査の実施及び分析 エ　思いやりをもち仲間と共に生きる人間関係づくり ・生徒指導の３機能を生かした教育活動 ・アルミ缶回収・ボランティア活動 ・挨拶運動 ・不登校等学校不適応への対策及び未然防止	○第２期「未来を拓く学校づくり」推進事業に取り組む中で、「非認知能力」について研究を進め、「網野学園で育成したい非認知能力（指標）」を作成し、それに基づいて授業研究を進めることができた。 ○小学校から中学校への円滑な接続を目指し、「６年生中学校部活動体験」「６年生中学校授業体験」を行った。今年度は、部活動体験を６月に実施でき、中学校３年生が中心となった活動を体験することができたことで、部活動への不安解消と期待、部活動選択の一助に繋げることができた。また、中学校授業体験はもとより、日々の小中連携加配教員(算数科)や英語専科教員による授業を小学５・６年対象に行ったことで、不安を軽減し、中学校への憧れを抱くと同時に学習に向かう力の高まりが見られる。 ○篠原嘉一氏（NIT 情報技術推進ネットワーク）を講師として今年度もゲーム・ネット講座を小学４年生と中学生を対象に行うことができた。特に中学生は、自分のスマホを持参可とし、自分を守るため、他の人を傷つけないための SNS の扱いについて学びを深めることができた。 ○「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を保幼小連携部で共有・取組を進め、短規モデルプランスタートカリキュラム、短期モデルプランアプローチプログラムの実践や検証を行うことができた。また、網野学園各園所の実態に合わせてカリキュラムの編成を見直すことができた。 ○今年度、保幼小連携部を中心に令和５年度版長期モデルプランアプローチプログラム・スタートカリキュラムを作成することができた。 ○小中合同アルミ缶回収ボランティアに取り組むことで、子どもたちは網野学園の一員であることを意識することができた。また、中学生が小学校に出向き一緒に活動することで、児童にとっては、中学生が自信をもって思いを表現し伝える姿に憧れをもち、目指す姿を学ぶ機会になった。中学生にとっては、小学生が一生懸命に取り組む姿を見て、アルミ缶回収に取り組む意義を考える機会となった。また、小学１年生から６年生までが中学生から小学校時代に頑張ってほしいことを聴くことで、中学校をより身近に感じることができた。 ○不登校傾向及び不登校児童生徒について経営会議や運営会議で状況を共有するととも

		に、教育相談部会を中心に事例研究会を行い、具体的な対応について協議することができた。また、園所から小学校へ、小学校から中学校への引継ぎシートで確実に情報を引き継ぎ、スムーズな接続ができるようにしている。今後も、10年間を見通して、学校園所が家庭との連携を進めながら、一人一人の幼児児童生徒が、学校園所に適応できる力を身に付けていけるようにしていく。
幼児児童生徒、教職員の交流と協働	ア　目指す子ども像の実現に向けた教職員の協働及び教職員の交流 (ｱ)　教職員の合同研修会・実践交流の実施 (ｲ)　授業研究会、園所参観を通した研修 (ｳ)　学年部会を通した研修 イ　「自尊感情」と「コミュニケーション能力」の向上を目的とした交流事業 (ｱ)　６年生網野中学校合唱祭参加 (ｲ)　６年生体育祭取組み見学 (ｳ)　６年生部活動体験 (ｴ)　合同校外学習及び学びの交流 (ｵ)　小中合同交流事業（友だち交流会等） (ｶ)　小学校体験授業時の１年生との交流 (ｷ)　５歳児交流会	○６年生中学校授業体験は、各小学校の児童をグループにして活動させたことで、個々の児童が交流する機会となり、中学校入学後のイメージをより具体的に持つとともに、同学年の仲間を知ることができ不安軽減に繋がった。 ○推進会議が中心となり、「ギミックブラッシュアップシート」を基に、授業改善を各校で進めることができた。網野学園授業研究会を２回実施し、事後研究会とともに実践交流を行い授業づくりについて協議することができた。 ○「未来を拓く学校づくり」推進事業に係り、招聘した講師による講演や研修会へ参加するなど、連携した学びの場を設定することができた。 ○保幼小連携部には校長、教頭それぞれ１名が入り円滑な連携を進めることができた。 ○養護部会を必要に応じて開催し、児童生徒の実態等の共有を図ることができた。
家庭、地域社会との連携、情報発信	ア　網野学園学校運営協議会の取組み (ｱ)　網野学園の教育や子育て環境について学校・家庭・地域が目標や課題を共有・協議し、具体的な取組みを推進して学園の教育環境づくりを進める。 (ｲ)　網野学園保幼小中一貫教育の推進に向け、学校（ＰＴＡ）園所（保護者会）、家庭、地域社会が連携・協働して取り組む。 イ　京丹後市ＰＴＡ協議会網野小中一貫校ＰＴＡの取組み (ｱ)　網野小中一貫校 PTA として、「学園合同挨拶運動・交通安全運動」等、一体となって取り組む。また、学園の「目指す子ども像」の実現に向け、保護者会とも連携して取り組む。 (ｲ)　どの家庭でも、幼児から大切にする「これだけは！」（家庭編）の取組み ・　基本的生活習慣の確立 ・　規範意識の基礎の確立 ・　家庭学習の習慣化 (ｳ)　「子育て講演会（ゲーム・ネット講座）」を網野学園と網野学園小中一貫校 PTA と共催で実施する。 (ｴ)学校・学園評価アンケート 「非認知能力」の育成に向けた啓発及び調査	○網野学園学校運営協議会を計画的に実施し、学校・家庭・地域が一体となった必要な教育支援について意見交流し、学園支援への参画意識の高揚に繋がった。 ○学期に一度、網野学園合同挨拶運動・交通安全運動を設定して保護者だけでなく関係団体や地域の方々と協力し、全ての学校で実施することができた。 ○どの家庭でも幼児から大切にする「網野学園『これだけは！』（家庭編）」のリーフレットを保護者に配布し、保護者へ保幼小中一貫教育で大切にしたい視点を知り、協力していただくことができた。 ○保幼小中一貫教育学園コーディネーターが中心となり、学園だより、ホームページ、リーフレット等を通して、学園の教育活動を保護者・地域に積極的に広報することができた。 ○学校支援ボランティア等を活用し、網野町の住民が教育活動に積極的に参加できる取組を進めることができた。 ○子育て講演会に篠原嘉一氏（NIT 情報技術推進ネットワーク）の講演を通じて、保護者が SNS 等について学べたことは、家庭での生活習慣の確立を図る上で有効であった。来年度も継続して SNS に係る最新の学習会を実施する。

4　今年度の成果と課題　改善方策

成果と課題	改善方策
（1）　組織体制及び運営上の改善 ○随時事務局会議を開催することで円滑な経営会議の進行管理を行うことができた。 ○運営会議を定期開催し、学園内の教育課題を共有し、教育目標・目指す子ども像の実現に向けた経営を行うことができた。 ○学園経営の基本方針に基づいた「重点的な取組み内容」「行動連携」を具現化するために、経営会議が中心となり、各会議・部会等で組織的に進めることができた。 ○運営会議、推進会議、領域部会の取組の進捗状況を把握し、成果・課題を整理し、総合調整や改善に努めた。 △事務局は、学園経営の円滑な進行管理に努めるとともに、「未来を拓く学校づくり」推進事業を基に「認知能力」と「非認知能力」を一体的に育む教育をさらに推進していく。	（1）　組織体制及び運営上の改善 ○「未来を拓く学校づくり」推進事業を通して、「認知能力」と「非認知能力」を一体的に育むための学園実践を積み重ねていく。 ○経営会議は、今後も、学園内の教育課題、各会議・部会等の動きを把握しながら、年間を通して課題を整理したり、新たな取組みを提起したりして、的確な学園経営を行う。また、各会議・部会担当校長・教頭は、経営会議に連絡報告及び決済を受けながら、実践の方向性・到達点を明らかにし、取組みを進める。 ○次年度も保幼小中一貫教育学園コーディネーターが、各学校園所への訪問、各会議・部会への参加を行い、状況把握と内容整理、調整を図る。 ○「網野学園で育成したい非認知能力（指標）」を基に、授業づくりの研究を深め、実践を積み上げる。 ○児童生徒の生活習慣や SNS との関連性の改善に向けて養護部会と生徒指導部会の連携を図る。 ○保幼小連携部会の担当者が同一校にならないよう調整し体制を組む。 ○令和５年度、第１回研修会（５月２日）第２回研修会（８月 21 日）第３回研修会（２月 14 日）の年３回の研修会を節目として研究を深める。 ○第２回全体研修会（夏季）については、網野学園小中学校全教職員で園所参観を行い、幼児の実態把握や教育・保育実践について共有化を図る。また、網野学園教職員が学べる場として講師を招聘し研修を深めていく。 ○学年部会については、年４回実施する。（５月・６月・７月・１月）授業日における開始時刻は午後４時からとするが７月は午後３時からの設定とする。各小学校の授業公開と関連させたり、計画に沿った十分な準備をする等見通しをもったりして運営し、限られた時間の中で学年部会の研修の充実を図る。 ○小５，小６学年部については担任と中学校数学、英語担当教員、小学校理科専科で構成する。(5 年部会…中学校英語科担当教員・小学校理科専科、6 年部会…中学校数学科担当教員) ○学年の課題から必要に応じて学年部会を開催できるものとする。領域部会については、年間計画に基づいて開催する。
（2）重点的な課題・取組について 教育目標・目指す子ども像・学校経営方針について ○教育目標及び目指す子ども像の実現に向けて PDCA サイクルで学園経営を行うことができた。 ○園所で「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を見通した実践研究を意欲的に進めた。 ○中学校卒業までの目指す姿の共有と系統的な教育、一貫した指導の継続を行うため、推進会議をもとに「網野学園で育成したい非認知能力（指標)」をつくり、活用することができた。	（2）　令和４年度に向けての重点的な課題・取組の方向 教育目標・目指す子ども像・学校経営方針について ○教育目標「将来に夢と希望をもち、郷土を愛し、知・徳・体の能力を伸ばす子どもの育成を図る教育の推進」及び目指す子ども像の実現に向けて、PDCA サイクルで学園経営を行う。 ○各期で育てたい非認知能力を明確に持ちながら、教育活動を進める。 ○園所で「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を見通した実践研究を意欲的に進めていく。

確かな学力の育成について ○小学６年生においては、思考力・判断力・表現力を付けるために、単元終了時に学習内容の理解度・定着度の検証や把握をするため、単元総括テストを作成し、実施することができた。 ○推進会議を中心に授業研究会を年２回実施し、「網野学園で育成したい非認知能力（指標）」を作成し、授業研究を進めることができた。 △さらに、「網野学園で育成したい非認知能力（指標）」を基に、学園として授業研究を進めていく。 △確かな学力の育成」については、網野学園の最重要課題であるため、授業づくりを中心に研究を進めてきた。児童生徒アンケート結果から学習意欲、学習内容の理解については肯定的な評価（90%）が高い。しかし、自分の考えをもち交流することは学校間・学年間に差が見られる。また、家庭学習について小中の接続をより丁寧に指導し、学習時間はもとより、自ら学習する力を育成する必要がある。 △今年度の学園児童生徒アンケートの分析から、課題を明確にし、学園としての手だて、指導の方向性を明確にし、具体的な取組を進める。特に、家庭学習の充実と時間の確保が課題となる。	確かな学力の育成について ○主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業デザイン、ゴールの姿をイメージした単元全体を通した授業づくりについて、研究・実践を推進会議が中心となり進める。なお、学力向上に関する内容について協議する際は、小中連携加配も推進会議に参加する。 ○育成したい非認知能力（指標）を基に授業改善を進め、確かな学力の育成を目指す。更には、非認知能力を伸ばすことが認知能力を伸ばすことに繋がることから「学びに向かう力、人間性の涵養」の観点から「主体的に学ぶ力」、「コミュニケーション能力」の育成に視点をおいた授業実践を行う。 ○GIGA スクール構想による一人１台のタブレットを活用した授業改善を進め、実践を積み上げる。 ○単元全体を構想することで、授業のゴールの姿を明確にし、子どもが主体となる授業づくりを進める。子どもの活動時間を確保し、学力の向上を目指す。 ○確かな学力を身に付けさせるため、推進会議が中心となり、各校の実態や状況を交流し授業改善に活かす。また、各種テストの分析を丁寧に行い、課題に対して各校の実態に応じた手立てを講じる。 ○学園として、家庭学習・基礎学力の定着に取り組む。特に家庭学習については保護者とも連携し、家庭学習習慣の定着・内容の充実（自主的な学習）を目指した取組みを更に進めていく。 ○小学６年生においては、思考力・判断力・表現力を付けるために、単元終了時に学習内容の理解度・定着度の検証や把握をするため、引き続き単元総括テストを作成し、実施する。 ○小学４年生においては、Ⅰ期の最終学年であり、基礎基本の定着に向け小４ふりかえり学習を継続して実施する。 ○学園としてⅠ期からⅢ期までの指導指標を示し、家庭学習における目指す子どもの姿を児童生徒、教職員、保護者が共有し家庭学習に取り組み、確かな学力を付けていく必要がある。また、園所においても保護者の協力を得ながら、家庭学習がんばり週間を同一時期に実施する。
規範意識の醸成について ○「規範意識の醸成」については、児童生徒及び教職員アンケート結果や児童生徒の状況から中学校においてはほぼ定着（99%）してきている。小学校では、学校間、学年間に差が見られ更に定着させるための取組が必要である。 △行動連携『どの家庭でも、幼児から大切にする「これだけは！！」（家庭編）』の中の、規範意識の基礎の確立の中で、「テレビ・ゲーム・インターネット・SNS などのルールを決める」を挙げている。しかし、網野学園生徒指導部のアンケート結果からも、大きな課題になっている。	規範意識の醸成について ○網野学園「これだけは！」、網野学園「これだけは！」（授業編）の見直しと改訂を推進会議を中心に行い、各校で継続して取り組み、落ち着いた環境づくりを進める。 ○篠原嘉一氏による「ゲーム・ネット講座」については、新たに小２年生も加え、小学４年生、中学生、網野学園保護者を対象に経営会議、運営会議が主体となって実施する。（小学生は北小、中学生・保護者は網中を会場とする）保護者の部（子育て講演会）については、主催は網野学園とし、運営は運営会議が行う。また、PTA 及び保護者会とも連携し、特に、園所の保護者への参加も進める。 ○ゲームや SNS の扱いについて、自己コントロールを身に付け、正しく使う力をつけるために、学

	園児童生徒アンケートの分析から生徒指導部会と養護部会が連携しながら取組を進める。
豊かな人間性について ○不登校傾向児童生徒について毎月挙げるとともに、経営会議、運営会議等で確認し実態交流を行った。 ○引継ぎシートを丁寧に作成し、園所小間、小中間の接続を丁寧に行うことで不登校の解消に繋げている。 ○教育相談部で事例研修会を実施し、不登校児童の事例をもとに児童生徒とのつながりや家庭支援の手法等を学ぶことができた。また、SCやSSWの専門機関と連携を図り、状況改善に向けての取組を進めることができた。 △「豊かな人間性」につては、アンケート結果から学年が上がるにつれ、自己肯定感や自尊感情にかかわる項目が低くなっている。 △学園評価アンケートから「自己肯定感」や「将来の夢や目標」をもつ児童生徒の割合が学年が上がるにつれ、減少する傾向にある。	豊かな人間性について ○自己肯定感をもち将来を展望できる力を育むことができるよう、より一層豊かな人間性を育む学習や活動を取り組んでいく。 ○多様で複雑な不登校の要因や背景をできる限り的確に把握し、切れ目のない組織的な支援をしていく。重点的な取組み内容の中の「豊かな人間性の育成」に位置付け、「自立的に生きる基礎の確立」に向けて、家庭と連携し系統的に取組みを進める。 ○情報共有を丁寧に行い、不登校の未然防止、早期解消、居場所づくりに向けて取組を進める。各ケース会議、各関係諸機関との連携を強化する。 ○育成したい非認知能力（指標）を基に、学園の教育活動及び各園所・学校での教育活動を通して育んでいく。
保幼小中一貫教育の具体的な内容 ○網野学園Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期のゴールの姿を各学年部会で実態交流するとともに、育てたい非認知能力（指標）をつくり研究を進めることができた。 ○新型コロナウイルス感染症予防対策のため、変更を余儀なくされた行事や取組があったが、工夫をしながら多くの事業や行事を実施することができた。 ○保幼小中一貫教育学園コーディネーターが、各会議、各部会等に参加し経営会議での方向性等について把握し、整理したり調整したりしながら、目的に沿った連携や取組を進めることができた。各園所・小学校を訪問し、各校の授業や取組みを便り等で発信し学園内の各園所小中学校間をつなぐことができた。 ○保幼小中一貫教育学園コーディネーターが網野学園運営協議会の事務局を務め、地域学校協働本部地域コーディネーターと共に、丁寧な連携を進める中で、保護者・地域の方々の学園運営への参画意識の高揚につながった。	保幼小中一貫教育の具体的な内容 ○確かな学力の育成に向けた具体的な取組として次の２点を行う。 ① 小中連携加配を活用し、６学年部会で単元総括テストを作成し、実施する。 ② 各学年で作成した「網野学園で育成したい非認知能力」について研究を進め、授業改善を行う。 ○部活動体験は中学３年生が活動している５月に実施する。また、６年生対象入学説明会・中学校授業体験は11月に実施する。 ○５歳児が一堂に会し、他の園所の仲間と交流を深めるため、５歳児交流会を実施する。 ○各園所は近隣の小学校行事等の見学を通して、子どもたちが小学校施設への出入りや行事を知る機会を設定する。 ○学園の課題である「基本的生活習慣の確立」「規範意識の基礎の確立」「家庭学習の習慣化」について網野学園小中一貫校 PTA として、園所保護者会とも連携し課題解決に向けて取組みを進める。 ○就学前から中学校卒業までを見通した家庭との連携を進める上で、園所保護者会との連携を進める。 ○網野学園学校運営協議会での交流・協議を通して、更に学校・家庭・地域が参画意識を高め、一体となって教育力のある学校づくりを目指す。

（別紙様式２）

令和４年度　丹後学園保幼小中一貫教育報告書

１　「目指す子ども像」、教育目標

①ことばで伝え合い、主体的に学ぶ子　【知】
②自分を大切にし、人を思いやれる子　【徳】
③ねばり強く身体をきたえる子　【体】
教育目標「夢と希望と創造性あふれる豊かな心を持ち、未来に向けて主体的に生きる子どもの育成」

２　保幼小中一貫教育として解決を目指す重点課題、取組の柱とする内容

①幼児期の終わりまでに育ってほしい１０の姿についての研究・実践や各教科の目指す資質・能力のために生徒指導の３機能を授業にどのように活かすかを研究する。授業研究の教科として児童生徒の実態、課題克服の必要性があるため『国語』を重点とし、文章を正しく読み取り、じっくり考え、適切な表現ができることをめざす。
②保育所・こども園・学校間が連携して、就学前から中学校卒業までを通して適時性、一貫性・連続性のある教育課程を編成し、小中合同事業・保幼小接続に係わる事業・小小連携合同事業と３つの事業の充実を目指す。
③丹後学園の取組や事業等を積極的に発信することで保護者や地域の方の理解を一層深める。

３　保幼小中一貫教育の具体的な内容と評価

項目	内容	評価 （実践の過程・幼児児童生徒の姿・教職員の見方等）
幼児児童生徒の実態や課題、目指す子ども像や目標、方針等の共有方策	①子どもの交流を図る行事等の実施を通して、「集団生活の中で人と関わる力」や「コミュニケーション能力」を高める。 ②重点教科を「国語」とし、他教科の指導についても同様に主体的な学びに向けた実践を積む。学年部会では、算数科の授業づくりも検討・交流し充実させる。 ③全体研修会、授業を通した研修会（３回）、学年部会を通した研修を計画的に実施し、目指す子ども像の実現、目指す教師像の意識化に努める。 ④月１回の計画的な経営会議（校園所長会議）を開催し、正確な実態把握に基づく方針を策定し、全教職員への情報提供を行う。	○一昨年からの新型コロナウィルスの影響で行事に対して制限があり、経営方針や計画について、予定どおりに進めることができない部分があったが、授業研究会や、部活動見学、授業体験等は実施することが出来た。また、丹後学園学校運営協議会の委員の方々には、挨拶運動や授業や体験活動等の参観をとおして、小中の連携や子どもたちの実態を見ていただく機会となった。 ○経営会議を定例化し、運営会議・教育課程会議と学力充実部会・教育相談部会・生徒指導部会・保幼小接続部会の取組の進捗や実践後の成果・課題を交流し、今後の方向性を示し取組を進めることができた。 ○国語を小中がともに重点に置き、授業の公開や事後研が実施できた。また、京丹後市保幼小中一貫教育授業研究会で、２小学校での授業公開や丹後学園の実践発表ができた。 ●一斉学年部会で、ＩＣＴ活用に関して、各期に応じてより効果的に使用する単元等を見極めておく必要がある。また、中学校での定期考査について小学生の不安を軽減していく。（定期考査のガイダンス、体験実施等）

		《事務局会議（代表・庶務・学園コーディネーター)》 ○事務局会議を開催し、各会議、部会等の実践状況や学園内の教育課題を把握し、教育目標の達成に向け経営会議等の調整・事務作業を行った。発達段階に合わせた読むこと、コミュニケーション能力、情報モラルにおける指導の標を提案した。 ○学園経営方針に基づき、運営上の課題の検討や調整を行い、各校での年度初・末全体研修会、夏季研、教育講演会を充実させるために事前準備、事務作業等を進めた。 ○経営会議終了後は、会議内容について即日コーディネーターがまとめ、各校・園・所に発信した。 ○教育目標、目指す子ども像を保幼小中で確認し、子どもたちの成長と発達の特性や課題を共有して適切な指導を継続してきた。また、指導については一貫性や連続性を意識した実践ができた。 ○言語活動（読むこと）、コミュニケーション能力、情報モラル等について、0 期からⅢ期の各段階でつけるべき力の明示をすることができた。 ○各学校等で課題に応じた教育実践を行い、全ての学校等が中学校を卒業する姿を想定し、生きる力の育成につながる指導ができた。（自立につながる意図的な指導） ●次年度さらに保幼小中一貫教育を推進していくため、0 期からⅢ期の各段階でつけるべき力の実践や研究を深めていくことが必要である。
就学前から中学校卒業までを見通して一貫した指導、教育課程	①就学前から中学校までの一貫した生徒指導、自己有用感を高める生徒指導を進め、コミュニケーション能力の育成に努める。 ②指導方法の系統性や一貫性を重視するために、「目標と指導と評価の一体化」の観点から国語を研究し、指導の方向を２小学校でそろえる。 ③総合的な学習の時間を活用した「丹後学」を教育課程に位置づけ、実践研究を進める。 ④学習指導・生徒指導を大きな柱として、10 年間を見通した取組を展開する。 ⑤小１プロブレムを解消するための、保育所やこども園と小学校との連携を進める。 ⑥中１ギャップ解消のため小学６年生と中学生との交流事業や体験学習等を推進する。	○各期に応じた昔話、物語をもとにした創作劇や、地域と連携し、地域から学ぶ学習結果の発表の質的向上が、各期の子どもたちの大きな自信となった。（探求し、伝える内容をわかりやすく工夫した表現や、友達を思いやり協力したり折り合いをつけたりしながら味わう達成感、成就感が次の課題へ挑戦しようとする意欲を高めた。） ○「中学校授業体験、部活動見学」「小学校合同校外学習」「丹後こども園・宇川保育所合同での 1 年生と 5 歳児のなかよし交流」等、制限のある中、効果的に進めることができた。（つけるべき力をつけるべき時期につける、小学生や中学生の自身を想定した取組） ●育てたい力が、より検証しやすい取組の計画と予想される課題に対する改善策の検討を進める。

幼児児童生徒、教職員の交流と協働	①２小学校が集合して実施する事業と各校で共通して実施する事業を行う。【２小学校合同事業】 ②教職員全体研修会・京丹後市小中一貫教育授業研究会を実施するとともに、保幼小接続部会や期別部会・学年部会を開催して、それぞれの課題の改善や解決に向けた取組を実践及び発信する。 ③中学校１年生入学後１カ月ごろの状況及び出口となる中学３年生の授業公開を行い、多様な視点で課題共有すると同時に指導について研究協議を行う。（中３の公開授業）【小中合同事業】 ④教職員間…学年部会での授業研究会・統括テストの活用、保幼小接続部会でのスタート研修会【保幼小接続に係わる事業】 ⑤保幼小の子ども…５歳児と小１年生との交流会（２回） 保幼小の教職員…５歳児と小１担任の夏季研修会、テーマは「話す・聞く」	○小、中学校の授業公開と事後研が実施でき、小学校の指導が中学校でつながり、連続し発展してきていることを振り返る意義ある機会となった。 ○本年度の夏季研修では、非認知能力を伸ばすことの重要性や教育現場で伸ばすためにできることなど講演された内容を教職員全体で確認できた。 ○小小合同行事、小６部活見学、小６授業体験、ふれあい交流会等は中学校生活への不安を解消する機会になった。 ●行事の精選や各期に応じた実施形態の工夫が必要である。（ＩＣＴの活用等）
家庭、地域との連携、情報発信	①「丹後学園学校運営協議会」の機能化と充実を図る。（年間２回） ②「丹後学園だより」等を発行し、保護者や地域に配付することで、理解を得られるようにする。また、各校のホームページにて、取組の状況を発信するように計画する。 ③学校支援ボランティアの方々による支援をいただき、教育活動の内容充実に努める。	○予定していた年間計画は、延期や中止をせざるを得ない実状もあったが、実施形態や実施期日を変更したり、時間差を設けたり参観等工夫をしながら教育活動を行った。 ○小中一貫校ＰＴＡと市教委とともに教育講演会を開催し、今の子どもたちとの接し方や学力や社会性・人間性を高めていくにはどうすればよいのか等を保護者、地域住民と学ぶことができた。 ○学校と家庭、地域社会の横の連携を深めるために丹後学園学校運営協議会委員、町内民生児童委員、主任児童委員、保護司、各種団体の方々に保幼小中一貫教育の支援、協力、理解を得ることができた。 ●保幼小中一貫教育の成果として顕われた子どもたちの成長を広く発信し、地域住民へ学園のめざすところがさらに浸透するように取組を継続させていく必要がある。 ※次年度も、１０月に２６日予定している教育講演会を学園ＰＴＡ行事として、位置付ける。

４　今年度の成果と課題　改善方策

成果と課題	改善方策
今年度の成果 ①導入準備期間を含め８年間行ってきた実践を活かして、本実施７年目の丹後学園の経営を行った。組織や会議について当初計画したことが、コロナ禍で、変更を余儀なくされたが、安全を優先し、可能な範囲で実施できた。 ②丹後学園運営協議会（名称：丹後学園教育応援会）を立ち上げて３年目で、地域への啓発に心がけ、今年度は参観の機会も増え、活動が前へ進んだ。 ③小・中学校だけでなく、こども園・保育所も含めた取組の実践を進め、『主体的・対話的で深い学び』	○経営会議は、学園内の教育課題、各会議や部会等の活動状況を把握しながら、恒常的に課題を整理や新たな取組を提起し、学園経営を行う。 ○各会議・部会担当校園所長は、経営会議に事前連絡、事後報告及び決裁を受けながら、実践の方向性・到達点を明らかにし、取組を進めていく。 ○部会は、学力充実部、教育相談部、生徒指導部・保幼小接続部の４部会とする。 ○教育課程会議兼学力充実部会については、教務主任が担当し、学力の調査・分析や学力・授業力向上を図る計画・実践に関わる進行管理、検証等を行

による指導改善をテーマに掲げ、各保幼小中のそれぞれの実態に合った研究が進んだ。保育所やこども園の園児の状況を学園として情報共有を行うことができ、保幼小の接続に関する学園としての研修が進んだ。 ④小１プロブレムを解消するための、保育所やこども園の園児の状況を学園としての情報共有と交流を丁寧に行い、令和元年度の「教育フォーラム」で発信した「丹後学園」の研究の深化・検証の推進の継続ができている。 ⑤小学校間（校区２小学校）の学年ごとの合同学習、修学旅行等を行い、児童の交流が深まると同時に教員の指導方法等の交流も深めることができた。 ⑥２学期末に、今年度は中学校の特支担当も参加して、６年生の授業参観と懇談をもつことによって、小中の連携の円滑な接続が組織として積極的にできた。小学校においては、３学期にどのような力をつけて中学校に送り出せばよいのか見通しをもつことができ、中学校においては、余裕をもって各学校の集団の雰囲気や児童の実態や課題などの把握ができ、入学後の見通しがもてた。 ⑦小学校在籍中１５日以上欠席のある児童の個別記録「丹後学園教育相談ファイル」を作成し、実態や指導・支援のあり方等を円滑に中学校に接続する予定である。 ⑧小学校と中学校との教職員の意見交流及び合同研修を通して、相互理解を深めながら、市保幼小中一貫教育授業研究に向けて、学園全体で、就学前から１０年間の学びを学園として今後どのように進めていくべきか、保幼小中一貫教育モデルカリキュラムに示されている計画や指導に照らし、言語活動や学び方等の中から、本学園が重点としている指導内容を整理することができた。 ⑨実態に応じた指導方法の工夫・改善について、各校ごとの授業研究会を通して研究協議を行い、前進させることができた。また、ゴールとなるめざす中学３年生の姿を共有することができた。 ⑩読む力の育成を重点にした研究を継続して行うことで、目標と指導と評価の一体化を目指す授業づくりの研究が深まった。 今年度の課題 ①今年度の研究を深めた、読む力の育成を中心とした各期の系統性を重視したカリキュラムの研究実践の見直しを進めていく。 ②学力向上に資するための「モデルカリキュラム」の活用の模範的な研究を深めていく。	う。(※研究のテーマ　「主体的で、深い学びの授業づくり～生徒指導の実践上の４視点を生かして～」を追究し、国語を重点教科として論理的に思考し、読む力を高め、適切な判断と表現ができる力をつけることを目指す) ○令和４年度と同様に、重点的な取組内容として「確かな学力の育成」「コミュニケーション能力」「評価を通した取組の充実」を設定していく。 ○「確かな学力の育成」に関しては、幼児期の終わりまでに育ってほしい１０の姿についての研究・実践や各教科の目指す資質・能力のために生徒指導の３機能を授業にどのように活かすかを研究する。具体的には、文章を正しく読み取り、じっくり考え、適切な表現ができることをめざす。授業研究の教科として『国語』(児童生徒の実態、課題克服の必要性があるため)。また、算数についても課題克服のため、学年部会で授業づくりを検討したり、総括テストの活用、実践したりして指導の検証や児童の学力実態を把握し、授業改善につなげる。 ○「コミュニケーション能力」に関しては、各園所学校の保育・教育活動、各部会（４部会）の事業内容に、コミュニケーション能力の育成につながる計画を立案し行う。 ○「目標と指導と評価の一体化」に関しては、学年部会では、課題となる算数の単元にも着目し、これまでに作成した総括テストを活用し、授業研究を行い、授業改善を図る。また、中学校では授業における指導目標をもとに指導した結果を定期テストで分析し、具体的な改善策を導き実践する。 ○学園評価については、２学期末までに児童生徒、保護者、教職員、学校関係者（学校評議委員、学校運営協議会委員、民生児童委員）が、教育目標の達成に関わる内容をアンケートに回答し、その結果を分析する。成果と課題をより明確にさせ、具体性のある改善策を検討していく。 ○保幼小接続部として、保育所・こども園の保護者に対して、小学校で必要な力や社会性など一緒に学べる機会を設定していく。 ○小学校で気になる児童が、中学校で適応しにくくなることもあるので、児童の見立てや支援、家庭との連携を大切にして教育相談活動を行い、小学校での様子（本人・家族・医療との連携等）を丁寧に記録に残し、中学校につないでいく。 ○学園ＰＴＡと連携し、「家庭学習の手引き」を活用しながら、家庭学習習慣の確立を目指した取組を更に進めていく。 ○ケース会議等を通じて、本人を取り巻く生活環境や保護者の生育歴等の実情を踏まえるとともに、子の将来を見据えた指導の支援策を関係機関と連携を図り、対応していく。

（別紙様式２）

令和４年度　弥栄学園保幼小中一貫教育報告書

１　「目指す子ども像」、教育目標

教育目標
「ふるさとを愛し、主体的に学び、心豊かで、たくましく生き抜く子どもの育成」

目指す子ども像
（知）知識と技を磨き、活用する子　＊自ら課題に取り組む（自主的な姿勢）
（徳）自他の良さを知り、共に伸びる子　＊仲間と知恵を絞る（対話的な学び）
（体）心身を鍛え、何事もやりぬく子　＊解決策を探り、自信をつける（深い学び）

２　保幼小中一貫教育として解決を目指す重点課題、取組みの柱とする内容

１「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す授業づくりの推進
・授業実践力等の向上（他校種研修、授業研究会、全体研修会等を通じて）

２　自尊感情の醸成を目指し、生徒指導の３機能を生かした実践の推進
・異年齢の交流活動、自尊感情、自己有用感、上級生への憧憬

３　教育活動全体を通して「思いやる心」の育成
・教科としての道徳の授業改善
・情報を吟味し精査する力の育成

３　保幼小中一貫教育の具体的な内容と評価

項目	内容	評価 （実践の過程・幼児児童生徒の姿・教職員の見方等）
幼児児童生徒の実態や課題、目指す子ども像や目標、方針等の共有方策	１　弥栄学園の組織の活性化 （１）　経営会議、運営会議、教育課程会議との各部の連携 ○経営会議　１１回開催 ○運営会議　９回 ○教育課程会議　６回 （２）各会議、各部の中での各校の交流と分析、指導方針の確認 ○生徒指導部会　４回開催 ○教育相談部会　４回 ○養護部会　４回 ○事務部会　９回 ○学年部会　３回 （３）全体研修会で子どもの実態や分析結果、指導方針の共有 ○第１回全体研修会 5/2 ○第２回全体研修会 8/18 ○第３回全体研修会 2/15 於：弥栄中	（１）　組織運営について ア　学園規模に合わせた組織体制の改編を行って２年目となった。経営会議が運営会議、教育課程会議、学力充実部会、その他学年会を含めた各部会の取組みの進行管理と評価をその都度行うことで、弥栄学園として保幼小中一貫教育の取組みが計画的に進められた。 イ　経営会議、運営会議、教育課程会議の３会議は月に一度定例会議を開催するが、ライン組織のつながりという点では、それぞれの会議開催日が有機的なものになっておらず、指導助言や決済等がスムーズに行えなかった。 （２）　各活動における交流 ア　１中２小１園の特色を生かして計画的にそれぞれの会議、部会が活動を実施し、１０年間を見通した一貫性のある指導のための協議・交流を行った。各校園の指導や校風等を理解してお互いのよさや強みを学び合い尊重する機会となり、実践意欲の向上につながった。 イ　各会議、各部が指導の方向性を決めて各種活動に取り組むことはできたが、活動によっては各校園の全職員に目的や活動内容等が十分共有されたりされていなかったものもあった。 （３）　全体研修会 昨年の全体研修会は、３回のうち２回が紙面開催となった。今年度は、人数や会場の広さを考えた上で３回とも集合型の研修を実施した。学園の方針、教育目標、重点課題、取組みの柱等を周知徹底し、学園全体で共通認識を深めることができた。また、今年度は

		全体研修会において、不登校にかかわる外部講師を招聘しての研修を２回実施した。不登校傾向や不登校などの未然防止のための指導・支援の在り方を学ぶことができ、実践力を高められる場となった。
就学前から中学校卒業までを見通して一貫した指導、教育課程	2　発達段階に応じた系統的な指導・活動 （1）家庭学習習慣化に向けて 〇家庭学習がんばり週間 （2）円滑な接続に向けて 〇園小接続プランの実践 （3）保幼小中一貫した授業づくりの推進 〇授業改善で目指す児童の姿の共有	（1）　家庭学習がんばり週間 家庭学習の取組みを中学校の期末テスト期間に合わせて３回実施した。学習習慣を身に付けたり、学習意欲を高めたりするための働きかけや保護者が家庭で取り組めること等について、学園全体で共通理解を図り実施することができた。保護者の感想からも分かるように、多くの家庭で家庭学習や学習環境等について振り返る機会となっている。家庭学習における系統性や学校間・担任間の差異を解消するとともに、各家庭における９年間を通した家庭学習の連続性につながっている。 （2）　保幼小接続モデルプランの実践 ２小学校での確実な実践に向け、年度当初に園小接続部会を開催してスタートカリキュラムの確認・検討を行った。その後の部会では接続モデルプランの評価等を行い、各校における取組状況や成果・課題を共有した。定期的に交流することで年度末における接続プランの見直し・改善につながっている。 （3）　授業改善に係る３つの資料 ①「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善、②「主体的・対話的で深い学び」における目指す姿、③「生徒指導の三機能を生かした授業づくり」について、全体研修会等で発信し、共有することができた。作成して３年がたち、改訂を視野に入れた見直しを図っていく必要がある。
幼児児童生徒、教職員の交流と協働	3　教育活動の連続性・協働性 （1）授業研究会の取組み 〇弥栄中１年 英語 6/15 〇吉野小 11/16 １年 国語 ６年 国語 （2）園小連携 〇園小合同交流会 9/30 （3）小中連携 〇部活動体験 10/26 〇ふれあい交流会 11/8 〇中学校授業体験　9/29　体育 1/25　理科 （4）小小連携 〇各学年、年間１回の交流行事を実施 （5）学園における教育相談の充実 〇SCによるストレスマネジメント授業の実施（6年生）2月 〇教育相談事例検討会 11/10 〇実践報告「不登校への対応」	（1）　授業研究会 ア　今年度は計画通り小１、小６、中１において合同授業研究会を開催することができた。学園の教員が集まり、発達段階を踏まえた指導方法や学習形態等の工夫について共通認識を図ることができた。研究協議においては、各校種による授業観や評価観の差等が縮まるなど、お互いのよさや強み、文化等を理解することができた。 イ　第２回全体研修会において、教育課程会議が作成した「主体的・対話的で深い学びにおける目指す姿」を踏まえた実践ポイントを確認することで、２学期以降の授業改善の視点が明確になった。 ウ　６月の合同授業研究会（弥栄中）、１１月の合同授業研究会（吉野小）に向けて、公開学年にかかわる学園の教員が集まり教材研究等を行った。「主体的・対話的で深い学びにおける目指す姿」に基づいて発達段階にふさわしい効果的な指導方法等を検討することができた。 （2）　園小連携活動 園小接続プランに基づいて、児童園児の実態に応じた交流行事を計画通り実施することができた。当日は小１が中心となって活動を進め、自己有用感を高めた。配慮児童・園児の対応について、今後も事前に確認して安心感・期待感を感じさせたい。

	・弥栄中SC 5/2 ・市支援センターSC 2/15 （6）情報モラル教育に向けた取組み 〇情報モラル教室 11/28 ・篠原嘉一 様（NITネットワーク取締役） 〇情報モラルアンケート ・インターネットの利用に関するアンケート実施 （小４～中３）	（３）　小中連携活動 ア　部活動体験（５年：見学、６年：体験）では、中学校に入学することに対する不安の一つに上級生との関係をあげられるが、実際に部活動で中学生と交流することで、上級生のやさしさに触れ不安の軽減につながり、入学への期待を高めるものとなった。中学生にとっても、自尊感情、自己有用感を感じられる生徒指導の３機能をいかす取組みになった。 イ　今年度、小６の中学校授業体験は、実技（体育）と理科を実施した。中学校の体育館や教室で授業体験を行うことで、中学校の授業の雰囲気に触れ、学習への不安を軽減して入学への期待を高めるものとなった。 （４）　小小連携 ア　弥栄小と吉野小の同学年で交流行事や合同の取組みを実施した。合同の取組みでは、両校の児童に役割を分担するなどして児童が主体的に取り組めるように心がけた。また、児童の実態に応じた「付けたい力」を検討し、交流行事の事前指導に役立てた。 イ　学年会では、交流行事や合同の取組みの運営について児童数や児童の実態に応じて、子どもたちに力をつけられるように協議しながら取組みを行った。また、教材研究や授業の指導に関して、授業実践や単元計画、指導方法等を交流し、自校の実践にいかすことができた。 （５）　不登校未然防止等に向けて 年間を通じて不登校にかかわる研修等を実施することができ、教員の力を高める機会となっている。また、学園の教員が定期的に情報交換したり、援助方法を検討したりすることによって、児童理解や援助方法の幅が広がり、SC・SSWの活用がさらに促進されている。SC・SSWとの日常的な連携につながり、不登校対策に必要な教員の資質向上につながっている。 （６）　情報を吟味し精査する力の育成 ア　情報モラル教室 昨年に引き続き、篠原様よりオンラインゲームやインターネットトラブル等に関する知識・理解が深まり、ネット上での様々な事象に敏感に反応、軽微なトラブルでも認知できる情報モラルの力が高まった。啓発講演を実施する中で呼びかけにも関わらず保護者の参加者数は非常に少なかった。授業時間内に実施するため、お仕事の関係で忙しい時間帯と重複しているため、保護者のニーズに添った啓発活動を検討する必要性もある。 イ　情報モラルアンケート アンケート結果から、各校・学年の特長的な課題等が明確になった。結果については、校内だけでなく、学級懇談会等で保護者にも伝え、学校任せでは指導できないことを啓発した。今後も実態を正確に把握するためにアンケートを実施していきたいが、１年前のアンケート結果は参考にならないほどデータは常に変化していると考えられる。定期的に調査等を行い、実態を正確に把握するとともに学園・学校としての対応につなげていきたい。
家庭、地域社会との連携、情報発信	４　家庭、地域との連携・情報発信 （１）弥栄学園運営協議会との地域連携・教育環境づくりを進める。 （２）　弥栄学園便り等による広報活動を積極的に行う。	（１）　運営協議会との連携 弥栄学園運営協議会の活動が３年目となった。コロナ禍で学園の取組みを参観していただく機会が限られていたが、熱心に参加していただき、地域の方として学校の外から見た弥栄学園について貴重な意見を頂くこと

	（3）　学校行事等において学校支援ボランティアを積極的に活用することを通して交流を深める。	ができた。学園の活動や教育目標に対してさらなる理解や協力を得るために、啓発活動と同時に運営協議会と学園ＰＴＡと連携した活動にも取り組んでいきたい。 （2）　広報活動 こども園、各学校が、たよりやホームページで取組みを発信するとともに、保幼小中一貫コーディネーターが学園だよりの発信や弥栄学園運営協議会の取組みをコーディネートして、広く学園の活動について啓発を行った。 （3）　学校支援ボランティアの活用 地域のボランティアの方々に、こども園や各学校の教育活動や交流事業に快く多くの支援を頂くことができた。子どもたちと地域の方々との交流や学園に対する理解が深まり、学園・家庭・地域が連携した「横の連携」を深めることができた。

4　今年度の成果と課題　改善方策

成果と課題	改善方策
1　弥栄学園経営及び進行管理 数部門を統合し、本学園規模に応じた組織改編を行って数年がたった。簡素化することにより、一人一人の役割が明確になり、それが能率化・合理化につながっている。コロナ禍においても、それぞれの組織が見通しを持って計画的・主体的に活動等を実施することができた。本学園規模に応じた活動内容ということもあり、一つ一つの活動等を丁寧に確認しながら実施することができた。 活動計画を円滑に進めることは大切だが、それを目的化することのないように経営会議で進行管理する必要がある。 2　発達段階に応じた系統的な指導・活動 「家庭学習頑張り週間」等は、本学園の柱となる活動でもある。それらは各校での実施となるが、学園規模を生かして今後も丁寧に一つ一つの活動を進めていきたい。 3　教育活動の連続性・協働性 学園規模や立地条件等から交流連携活動は本学園の特長の一つでもある。コロナ禍ではあったが計画した行事等は実施することができ、教育活動の連続性・協働性につながったものと考える。今後も例年通りの活動とならないように目的や交流活動の経緯等を共通理解しなければならない。 4　家庭、地域との連携・情報発信 こども園、小学校、中学校がそれぞれに、たよりやホームページで各校園の取組みを発信するとともに、学園ニュース（教職員向け）、保幼小中一貫教育だより（保護者、地域向け）や学園ホームページでタイムリーに情報を発信し、学園の動きを広報している。また、学園のリーフレットを作成し、保護者や弥栄学園運営協議会、その他地域の方々に配布したり、弥栄学園運営協議会で学園の活動を紹介したりして、弥栄学園の活動についての啓発を行っている。 5　不登校未然防止等に向けて 今年度は、計画通り不登校にかかわる研修等を実施することができた。また、各会議等で学園の教員が定期的に子どもの様子を情報交換したり、援助方法を検討したりすることにより、指導の幅が広がり、SC・SSW の活用がさらに促進されている。	1　適正配置（令和６年度）となる可能性があるため、それに向けて新たな組織作りが必要となる。経営会議が主体となり、現在の各会議の位置づけや活動目的等を再確認しながら年間を通して新しい組織の基本形態を検討していく。 2　系統的で一貫性のある指導を行うための資料（授業改善に係る資料等）は、作成して数年経っているため、改訂を視野に入れた見直しを図っていく。 3　適正配置となる可能性を考慮し、次年度は小学校間の交流活動を各学年複数回実施する。 4　今後も継続的な情報発信と広聴活動（アンケート調査等）を積み重ね、考察を繰り返すことにより教育活動の成果・課題等を明らかにする。 5　不登校未然防止等に向けて、教育相談部が主体となった研修等を企画し、教育相談に対する教員一人一人の意識をさらに高めるようにする。

（別紙様式２）

令和４年度　久美浜学園学園保幼小中一貫教育報告書

１　「目指す子ども像」、教育目標

［教育目標］
「ふるさとを愛し、意欲的に学び、やさしい心をもち、根気強く努力する子どもの育成」
［目指す子ども像］
（知）意欲的に質の高い学力を身につけようとする子ども
（徳）自ら正しく判断、行動し、豊かな心をもつ子ども
（体）心身を鍛え、粘り強く最後まで、協力して取り組む子ども

２　保幼小中一貫教育として解決を目指す重点課題、取組の柱とする内容

（１）中期的な展望(取組の見通し)

年度	教職員の意識	学力	ギャップ（不登校）
R３ （６年次）	・新学習指導要領への対応 ・学力向上の方策を全職員で検討	学力向上試案の策定（教育課程会議）	接続期の校種間連携充実 事例研の継続
R４ （７年次）	学力向上の方策を全職員で検討・実践 新学習指導要領で求められている資質・能力の育成	学力向上方策の実践、改善（全学年）	学校に起因する不登校人数の減少 事例研の継続
R５ （８年次）	⇩	⇩	早期対応、情報共有の徹底（全職員の共有）
R６ （９年次）	⇩	府・全国学力テスト・調査全学年平均以上（学園）	⇩
R７ （10 年次）	久美浜学園保幼小中一貫教育の継続した取組の整理とまとめ 次の 10 年を見通し新たな取組の構築	府・全国学力テスト・調査全学年平均以上（全学校）	早期対応、情報共有の徹底（全職員の共有）

（２）重点目標
「意欲的に生活・学習に取り組む子どもの育成」～子どもの実態や系統性を踏まえた指導～

（３）指導の重点
『学力向上』①基礎・基本の徹底　②主体的に学ぶ力の伸長（授業づくり）　③家庭学習時間の確保

（４）取組の柱

ア　10 年間（就学前から中学校卒業まで）の幼児児童生徒の成長発達に全教職員で責任をもつという意識の向上
(ｱ) 久美浜学園全教職員がチームとして、みんなでやるという協働意識を醸成する。（対話と理解）
(ｲ) 目指す授業として、学習指導要領に示された「主体的・対話的で深い学び」の実現を意識する。その上で、学園テーマとして、「主体的に学ぶ力の伸長」を設定し、すべての教職員で幼児児童生徒が自らの主体的に学ぶ力を伸ばすための教育活動を進める。
イ　各校園所における規範意識の醸成を基盤とした落ち着いた学校（園）づくり、授業づくり
(ｱ) 生徒指導の三機能（自己決定・自己存在感・共感的人間関係）を生かした「わかる授業」により規範意識を醸成し、学ぶ意欲を育てる。
(ｲ) 各学校の重点研究をもとに、各学年単位をベースに授業研究を進める。特に「主体的に学びに向かう力」を育成する授業づくりの取組を進める。
(ｳ) 基礎・基本を徹底し、基盤となる力を十分付けきるとともに、当たり前のことが当たり前にできる雰囲気づくりを進める。
ウ　子どもの交流行事並びに教科指導交流の推進による行動連携強化
(ｱ) 共に学ぶ意識を育て、子ども同士を結び付ける保幼小、小小、小中における交流行事・授業
(ｲ) 豊かな教科指導を目指す指導交流（保幼小連携、小小連携、小中連携）
エ　保護者、地域とともに「久美浜を支える人づくり」の視点に立った取組を進める。
(ｱ) ＰＴＡ、学校運営協議会、地域学校協働本部事業との連携
(ｲ) 家庭学習時間の確保に向けた連携

３　保幼小中一貫教育の具体的な内容と評価

項目	内容	評価 （実践の過程・幼児児童生徒の姿・教職員の見方等）
幼児児童生徒の実態や課題、目指す子ども像や目標、方針等の共有方策	⑴　経営会議を中心に組織的且つ丁寧に、実態や課題、目標、方針等の共通認識を図り、久美浜学園としての共通確認・共有を図る。 ア　年度当初の学園全体会での提起と全体研修会での全教職員による協議を通して、共有を進める。 イ　年３回の公開授業と交流会で、教職員同士の「理解と対話」の充実を図る。 ⑵ 保幼・小・中で共通指導内容を確認し、ＰＤＣＡで改善を図りながら共通理解を深める。	○久美浜学園７校園が１つの目標に向かう中で、コロナ禍の状況に応じてＩＣＴ活用や取組の工夫を行い、教職員及び児童生徒園児の交流を確実に実施し、「理解と対話」の継続を図ることができた。 ○こども園・保育所の参観はできなかったが、６・10月に２小学校の授業公開・交流会を実施した。保幼小中の教職員による貴重な対面での協議を通して、協働的な指導の充実に向けてのよい機会となった。 ○共通指導事項を確認し、指導を継続していく。今後も、具体的な実践共有の場である連携部会の運営のあり方等を改善しつつ、引き続き目標やめあて、指導内容を振り返りながら進めていく。
就学前から中学校卒業までを見通して一貫した指導、教育課程	⑴　子どもの育ちと指導の一貫性を目指した教育課程編成 ア　考えを深め、コミュニケーション能力を高める学習の推進 イ　郷土への愛着と誇りをもち、人とつながる力を育てる学習の推進 ウ　保幼小の接続を中心とした教育課程編成 ⑵ 重点指導 ア　学力向上 ㈠ 授業規律の確立 ㈡ 基礎学力の定着と活用力を育てる授業づくり イ　不登校の解消 ㈠ 規範意識の醸成と基本的生活習慣の確立 ㈡ 学級活動の充実と児童会・生徒会活動等自主活動の活性化 ㈢ 自尊感情の高揚 ㈣ 保幼・小・中の連携強化 ウ　今日的課題（情報機器の安全な取り扱い） ㈠ 「ＩＣＴ活用及び情報モラル」に係る教育の推進 ㈡ 人権教育の推進	○学園テーマ「主体的に学ぶ力の伸長」を各校で追求し、ＩＣＴを活用した授業づくりを進め、 学園公開授業や各小中学校での研究において、成果を共有することができた。 ○ＩＣＴを活用した授業づくりについて、どの場面で、どのように使うのか、各校で研究を進めた。今後は授業スタイルの中にＩＣＴを組み入れ、より効果的な活用についての研究を深める。 ○学園独自で作成したアプローチプログラム、小１スタートカリキュラムの実施状況を検証し、よりよいプログラム等になるように改善した。 ○拡大教育課程会議の充実により、「資質・能力ルーブリック」の作成等、付けたい力の系統性を検討することができた。次年度は、その検証と実践を進めていく。 ○久美浜学園「身に付けたい言語能力表」や小中共通指導事項を確認・検討して取り組んだ。 ○ＰＴＡ・保護者会を巻き込んだ久美浜学園共通の「家庭学習がんばり週間」の取組を進めることで、学習習慣の定着を進めた。 ○教育課程会議では家庭学習時間の確保、養護部会ではメディアに係る０期の指導内容を含む保健指導系統表の作成（養護教諭による年長児への指導）、生徒指導部では情報機器に関するアンケートを行い、メディア・コントロールを学園全体で進めた。 ○教育相談部会では、ＳＣを中心とした事例研修会を実施したり、グループ協議による未然防止に向けた具体的方策を検討したりした。 ○学校生活の充実感を味わわせることや基本的生活習慣の確立を各校で図ること、教育相談部における事例研を通して、不登校の未然防止、解消に取り組んだ。 ○情報機器の望ましい活用（情報モラル）のための特別講演会を小３・４年生、中学１・２年生対象に実施した。

幼児児童生徒、教職員の交流と協働	(1) 全体会、全体研修会、学校園公開授業と分散会、学力・授業づくり部会、生徒指導・不登校防止部会、学年部会を中心とした教職員の交流と協働 ア　中学校卒業時の生徒の姿を常に意識した協議 イ　児童生徒の実態交流に基づく具体的な取組の推進 ウ　「主体的に学ぶ力の伸長」の系統性を意識した指導を目指す授業研究 (2) 学校、校種間をまたがった指導の推進 ア　小小連携、小中連携、専科教育、出前授業等、人的交流をもとにした協働 イ　振り返りスタディ等指導面での協働 (3) 幼児児童生徒の行動連携 ア　保幼の連携 イ　保幼小の連携 ウ　小小連携 エ　小中連携	○昨年度と比較すると、全体会・公開授業・交流会等の教職員の行動連携を図る機会が増えた。夏季全体研修会では、本学園の特徴である「不登校」について、ＳＣの講演やグループ協議を行い、見立て方や考え方を教職員で共通理解を図ることができた。「主体性」に向けた保幼小中の保育や指導の連続性をより確かにするために、実際に子どもの姿を見ることや教職員の交流を次年度以降も継続的に計画していく。 ○回数は限られたが、各校の授業研究会の案内を発出し、相互参観ができた。また、ＩＣＴの活用について、教育課程会議で各校の取組を集約し、学園だより等によって情報発信することで、各校の実践を広めることができた。 ○保幼小連携では、年長児メディア指導を養護教諭が行うことができた。小学校のよりよい学校生活に向け、よい機会となった。今後も、保幼小の連携のあり方を検討していく必要がある。 ○小小連携事業では、同学年によるオンラインを活用した交流が定着し、コロナ感染状況に左右されず、３小学校による連携が確実に行うことができた。 ○小中連携では、部活動はＤＶＤ視聴、１回の授業体験のみの実施となったが、児童アンケートから「中学校への見通し・意欲」につながる回答が多かった。 ○児童会・生徒会の合同会議は、対面による会議で計２回実施できた。また、ＳＤＧｓの取組や合同挨拶運動でも、各小中園所で意欲や意識を高める取組を行うことができた。
家庭、地域社会との連携、情報発信	(1) 学園の一貫教育に係る目標、活動等の広報及び啓発 ア　たよりの発行（学期１～２回程度）、有線放送による紹介 イ　リーフレットの作成（２月保護者参観等で配布、説明） ウ　ホームページによる広報活動（久美浜学園のページ作成） (2) 基本的生活習慣の確立に向けた共通指導の確認と指導の推進 (3) 学校運営協議会の取組を通した「久美浜を支える人」の協議 (4) 地域学校協働本部事業の積極的な活用等による久美浜町民の学校教育活動への参加と積極的支援 (5) 久美浜学園ＰＴＡ・保護者会との連携による家庭教育支援	○コーディネーターの活動により様々な取組を様々な機会を通じて広報できた。保護者アンケートでは、取組に対する肯定的な意見が増えている。しかし、今年度は事業の中止等があり、分からないという意見もあった。 ○本年度は、６つの地区区長会等への発信等を実施ができた。学園活動への協力や周知を継続するとともに、周知の工夫を考えていく必要がある。 ○学校運営協議会は３回実施し、学園基本方針や活動状況を説明した。３つの部会では、「久美浜を支える人づくり」について各団体と協議し、学校からは児童生徒の課題について提起するとともに、「学校の応援団」としてできることも視点とした交流も行った。さらには、上記内容を映像化することで教職員への広報も行い、幅広　い周知を行うことができた。 ○久美浜学園独自のＰＴＡ・保護者会が一緒に取り組むことで、より多くの家庭との連携が進められた。「あいさつ運動」「家庭学習がんばり週間」等 10 年間を見通した取組に一歩ずつつながってきている。

４　今年度の成果と課題　改善方策

成果と課題	改善方策
○新たな中期展望を設定し、本年度（７年次）で２年目となる。年度ごとに、丁寧に評価しながら、具体的な実践と検証を続けていく。 ○コロナ禍の中ではあるが、ＩＣＴ活用や取組の工夫により、昨年度以上に教職員及び児童生徒園児の交流を実施し、理解と対話の継続することができた。 ○教育課程拡大会議の協議を経て、「資質・能力ルーブリック」を作成し、付けたい力の系統的な指標を作成することができた。 ○テーマ「主体的に学ぶ力の伸長」を目指し、授業公開・交流会を２回実施し、ＩＣＴを活用を含め、授業研究を深めることができた。また、各校研究の共通視点でもあり、教職員の意識も向上できた。 ○経営会議の方針のもと、企画運営会議が事業を運営し、教育課程会議が学習指導等に関する内容の具現化を図り、相互に共有して進める運営の機能化を図ることができた。 ○コーディネーターの活躍により、広報・会議のまとめ・児童生徒・保護者アンケート等、幼小中のつなぎや周知が更に進んだ。 ○４ＰＴＡと３保育所園・こども園の保護者会も一緒に活動でき、学園ＰＴＡ・保護者会の基盤がより確かなものになった。 ○学校運営協議会で「久美浜を支える人」について、３つの部会で学校からの課題を提起して話し合った。また、協議会の様子を映像化することで、教職員への周知が進んだ。 ○共同事務室の取組として、規定や備品等の共通化・共用化、各種業務の見直し等を進めるとともに、定着させることができた。また、毎日のオンライン打ち合わせによる共同の日常化を進めることができた。 ○小学校への接続の１つの視点としても、年長児メディア指導を実施することができた。 △「主体性」「ＩＣＴ活用」等を視点とした授業改善について、各校の研究成果や学園授業研究成果をまとめ、分析、検証を行う。 △学園の児童生徒の課題として、不登校の増加がある。部会での事例研修・具体的な取組の協議等、地道な取組の継続が必要である。 △連携部会の取組は回数が限られている中で、ミッションを成果が見えるところまで高めることは難しかった。	・これまで積み上げてきた保幼小中教員の「対話と理解」をベースに、保幼小中一貫教育推進計画の共通理解を図る。また、学校園所公開や交流会を引き続き進める中で、保幼小中に係る共通視点を明確にした指導方法等の継続性について、研修及び協議を行っていく。 ・学力向上について、拡大教育課程会議において、CBTの結果分析を行い、児童生徒実態や課題を改めて共有し、具体的な取組へ落とし込むことを通して、検証と実践を積み重ねていく。 ・市保幼小中一貫教育授業研究会をよい機会と捉え、大きな視点である「主体的に学ぶ力の育成」に基づく、これまでの研究を整理し充実を図る。 ・授業研究の充実を目指し、教育課程会議が主となり学園の研究推進を行い、連携部会が具体的な授業づくりについて協議ができるよう、計画的に運営する。 ・児童生徒の生徒指導上の課題や不登校の状況から、学園全体での醸成すべき視点（非認知的能力等）を見出す必要がある。また、肯定的評価を基盤として、学園の教職員の指導観をすり合わせ共通化していく。 ・未然防止について、事例研修や入学説明会への講師招聘等、スクールカウンセラーの具体的な活用を検討する。 ・校種間での情報連携や家庭支援連携を進め、不登校の未然防止や早期対応に努める。 ・園所の「目指す 10 の姿及びそれに向けた取組や保育」を理解するとともに、保幼小の連携の深化を進める。 ・指導方法の具体的な継続性を図るため、保幼小のアプローチ・プログラムやスタート・カリキュラムのほか、小中間の教育課程上の様々なギャップの解消に取り組むため授業スタイルの確立も進める。 ・行動連携事業は、対面及びオンラインでの実施を継続し、教科内容を活かしたオンラインでの交流も検討していく。